

枇杷坂遺跡群

えん しょう ばう  
**円正坊遺跡IV**

長野県佐久市岩村田円正坊遺跡IV発掘調査報告書  
(弥生時代後期墓址、古墳・平安時代集落址、他)

2002.3

佐久市  
長野県佐久市教育委員会

枇杷坂遺跡群

えん しょう ぼう  
**円正坊遺跡IV**

長野県佐久市岩村田円正坊遺跡IV発掘調査報告書  
(弥生時代後期墓址、古墳・平安時代集落址、他)

2002. 3

佐 久 市  
長野県佐久市教育委員会



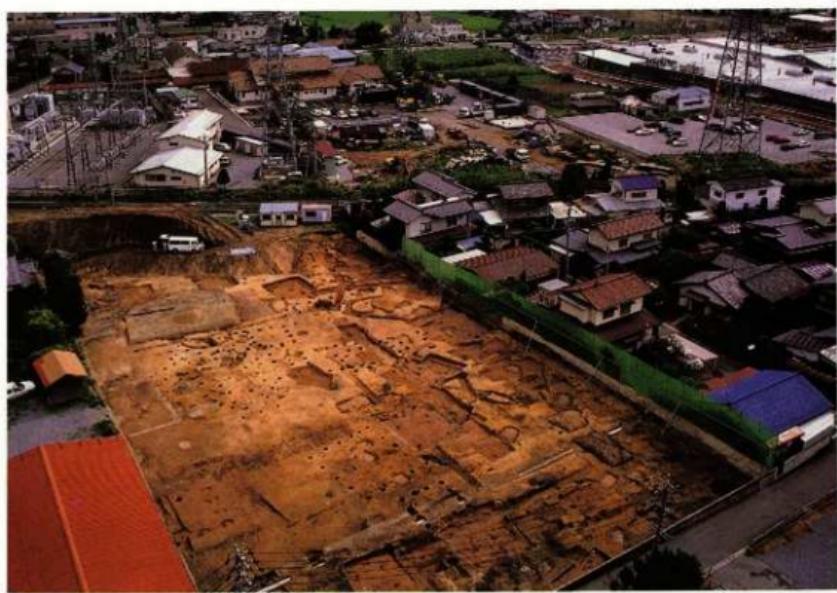
円正坊遺跡IV 航空写真（平成11年8月撮影 みすず航業）



円正坊遺跡近景（北方より南を望む）



円正坊遺跡近景（東より西を望む）



円正坊遺跡IV近景（北東より）



円正坊遺跡IV全景（平成11年度、南より）



円正坊遺跡IV全景（平成11年度調査、西より）



円正坊遺跡IV全景（平成11年度調査、南西の遺構群）



I地点全景（西より）



II地点全景（西より）



K地点全景（北より）



D・J地点全景（東より西を望む）

## 例　　言

1. 本報告書は、佐久市岩村田字円正坊地蔵において平成11年度から平成13年度にかけて行われた都市計画道路佐久駅藤科口線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は佐久市都市計画課の委託を受け、佐久市教育委員会文化財課が担当した。
3. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の地形図（1:25,000）、佐久市発行の基本図（1:2,500）を使用した。
4. 発掘調査は森泉かよ子が担当し、土器実測は堀益子が担当した。本書の編集・執筆は森泉が行った。
5. 航空写真・全体測量図はみすず航業に委託し、それを使用している。
6. 自然科学分析・鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
7. 須恵器の胎土分析は（株）第四紀地質研究所に委託した。
8. 本遺跡の遺物等の資料は佐久市教育委員会の責任下に置かれている。

## 凡　　例

1. 道標の略号は次の通りである。

H—堅穴住居址　F—掘立柱建物址　D—土坑　P—單独ピット　M—溝址　SM—周溝址

2. 掘図中の道標の縮尺は原則として1/80である。異なる場合は明記してある。
3. 掘図中の遺物の縮尺は1/4である。異なる場合は図中に明記してある。
4. 掘図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

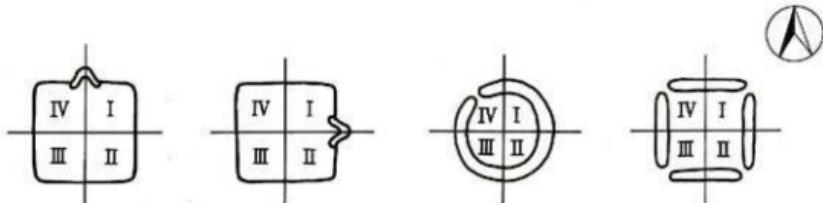
### 遺構

地山断面		燒　　土		粘　　土	
柱　　痕		埴　　方			

### 遺物

須恵器断面		黑色處理		鐵	
赤色塗彩					

5. 遺物の出土地点は下図の遺構分割によるものである。



6. 本地籍は地盤変動を受けたため、一つの遺構が水平方向に移動していた。ズレが確認できたものは平面図の元位置ある所を緑線で示した。

## 目 次

卷頭図版	
例言	
凡例	
目次	
第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	2
第4節 調査結果の概要	5
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	7
第Ⅲ章 基本層序	11
第Ⅳ章 遺構と遺物	13
第1節 坪穴住居址	15
第2節 挖立柱建物址	96
第3節 単独ピット	111
第4節 土坑	113
第5節 周溝址	115
第6節 溝址	122
第7節 グリット・表探遺物	125
円正坊遺跡I	127
円正坊遺跡V	141
第Ⅴ章 総 括	150
第1節 弥生時代	150
第2節 古墳時代	153
第3節 平安時代	164
第4節 まとめ	165
引用参考文献	166
付表 遺構一覧表	167
付図	177
円正坊遺跡から出土した炭化材・炭化物の同定 バリノ・サーヴェイ	177
土器胎土分析業務	
-円正坊遺跡IV出土の須恵器胎土分析及び報告書- (株)第四紀地質研究所	186
付 図 1~9	
胎土分析土器図版 1~4	
写真図版	

## 挿図目次

第1図 円正坊遺跡IV位置図	1
第2図 円正坊遺跡IV遺構配置図	6
第3図 円正坊遺跡発掘区設定図	7
第4図 周辺道路分布図	9
第5図 円正坊遺跡周辺地形図(1:10,000)	10
第6図 基本層序模式図	11
第7図 円正坊遺跡IV全体図(1:400)	13
第8図 H 1号住居址	15
第9図 H 2号住居址(1)	17
第10図 H 2号住居址(2)	18
第11図 H 3号住居址	21
第12図 H 4号住居址	23
第13図 H 5号住居址	25
第14図 H 6号住居址	26
第15図 H 7号住居址(1)	28
第16図 H 7号住居址(2)	29
第17図 H 8号住居址(1)	30
第18図 H 8号住居址(2)	31
第19図 H 8号住居址(3)	32
第20図 H 9号住居址	35
第21図 H 10号住居址(1)	37
第22図 H 10号住居址(2)	38
第23図 H 10号住居址(3)	39
第24図 H 11号住居址	41
第25図 H 12号住居址(1)	42
第26図 H 12号住居址(2)	43
第27図 H 12号住居址(3)	44
第28図 H 13号住居址(1)	49
第29図 H 13号住居址(2)	50
第30図 H 14号住居址(1)	53
第31図 H 14号住居址(2)	54
第32図 H 14号住居址(3)	55
第33図 H 15号住居址	58
第34図 H 16号住居址	59
第35図 H 17号住居址	61
第36図 H 18号住居址	62
第37図 H 19号住居址	63
第38図 H 20号住居址	65
第39図 H 21号住居址	67
第40図 H 22号住居址(1)	69
第41図 H 22号住居址(2)	70
第42図 H 22号住居址(3)	71
第43図 H 22号住居址(4)	72
第44図 H 23号住居址(1)	76
第45図 H 23号住居址(2)	77
第46図 H 24号住居址	79
第47図 H 25号住居址(1)	81
第48図 H 26号住居址(2)	82
第49図 H 27号住居址	83
第50図 H 28号住居址(1)	85
第51図 H 28号住居址(2)	86
第52図 H 29号住居址	88
第53図 H 30号住居址(1)	90
第54図 H 30号住居址(2)	91
第55図 H 30号住居址(3)	92
第56図 H 31号住居址	95
第57図 F 1・F 3号掘立柱建物址	96
第58図 F 2・F 5号掘立柱建物址	98
第59図 F 4号掘立柱建物址	99
第60図 F 6・7号掘立柱建物址	100
第61図 F 8・F 9号掘立柱建物址	101
第62図 F 10・F 11号掘立柱建物址	103
第63図 F 12・F 14・F 20号掘立柱建物址	105
第64図 F 13号掘立柱建物址	106
第65図 F 15・F 17・F 18号掘立柱建物址	107
第66図 F 16号掘立柱建物址	108

第67図 F19・F22号掘立柱建物址	109	第86図 IEO I E M 1・EM 3・EM 4～7号周溝址	
第68図 F21・F23・F24号掘立柱建物址	110	M 2・M 3号溝址	140
第69図 単独ピット	111	第87図 IEO V 全体図	141
第70図 土坑	114	第88図 IEO V H 1号住居址(1)	143
第71図 SM 1・SM 2号周溝	115	第89図 IEO V H 1号住居址(2)	144
第72図 SM 3・SM 8号周溝	117	第90図 IEO V H 1号住居址(3)	145
第73図 SM 4～SM 7・SM 9・SM 10号周溝	119	第91図 IEO V H 2号住居址	149
第74図 SM 11号周溝	121	第92図 IEO V (D 1・D 2) 土坑	150
第75図 M 1・M 2・M 3号溝状遺構	123	第93図 周溝墓分類図	151
第76図 M 4・M 5号溝状遺構	124	第94図 周溝墓実測表図	151
第77図 グリット・表採	125	第95図 円正坊遺跡IV周溝墓分布図	152
第78図 IEO I H 1号住居址(1)	128	第96図 円正坊遺跡IV土器分類図(1)	153
第79図 IEO I H 1号住居址(2)	129	第97図 土師器杯分類図(古墳時代)	154
第80図 IEO I H 1号住居址(3)	130	第98図 円正坊遺跡IV土器分類図(2)	156
第81図 IEO I H 2号住居址(1)	133	第99図 円正坊遺跡IV土器分類図(3)	158
第82図 IEO I H 2号住居址(2)	134	第100図 円正坊遺跡IV土器分類図(4)	160
第83図 IEO I H 2号住居址(3)	135	第101図 円正坊遺跡IV土器分類図(5)	160
第84図 IEO I H 4号住居址	137	第102図 円正坊遺跡IV古墳時代堅穴住居址変遷図	163
第85図 IEO I 土坑	139	第103図 円正坊遺跡IV土器分類図(6)	165

## 図版目次

巻頭図版1 円正坊遺跡IV航空写真	図版9 H14・H15・H16号住居址
巻頭図版2 円正坊遺跡IV近景	図版10 H17・H18号住居址
巻頭図版3 円正坊遺跡IV近景・全景	図版11 H19・H20号住居址
巻頭図版4 円正坊遺跡IV全景	図版12 H21・H22号住居址
巻頭図版5 円正坊遺跡IV I・H地点全景	図版13 H21・H22・H23号住居址
巻頭図版6 円正坊遺跡IV K・D・J地点全景	図版14 H24・H25号住居址
図版1 H1・H2号住居址	図版15 H26・H27・H29号住居址
図版2 H3・H4・H5号住居址	図版16 H28号住居址
図版3 H6・H7号住居址	図版17 H30号住居址
図版4 H8号住居址	図版18 H30号住居址
図版5 H8・H9号住居址	図版19 H31号住居址
図版6 H10号住居址	図版20 F1～F5号掘立柱建物址
図版7 H11・H12号住居址	図版21 F5～F12号掘立柱建物址
図版8 H13・H14号住居址	図版22 F13～F18号掘立柱建物址

- 図版23 F 19～F 23号掘立柱建物址  
図版24 F 22・F 24号掘立柱建物址・D 1～D 4  
図版25 S M 1～S M 5号周溝址  
図版26 S M 6～S M 10号周溝址  
図版27 S M 11号周溝・M 1～3号溝址  
図版28 M 4・M 5号溝址  
図版29 IEO I H 1・H 2号住居址  
図版30 IEO I H 4・土坑・EM 6号周溝  
図版31 IEO I EM 1・3～5・7号周溝  
図版32 IEO V H 1号住居址  
図版33 IEO V H 2号住居址・土坑  
図版34 H 1・H 2号住居址  
図版35 H 3・H 4号住居址  
図版36 H 5・H 6・H 7号住居址  
図版37 H 7・H 8号住居址  
図版38 H 8号住居址  
図版39 H 8・H 9・H 10号住居址  
図版40 H 10・H 11号住居址  
図版41 H 12号住居址  
図版42 H 12号住居址  
図版43 H 12・H 13号住居址  
図版44 H 13・H 14号住居址  
図版45 H 14号住居址  
図版46 H 15～H 20号住居址  
図版47 H 21・H 22号住居址  
図版48 H 22号住居址  
図版49 H 22・H 23号住居址  
図版50 H 23・H 24・H 25号住居址  
図版51 H 26・H 27・H 28号住居址  
図版52 H 29・H 30号住居址  
図版53 H 30号住居址  
図版54 H 30・H 31号住居址  
図版55 掘立柱建物址・土坑・S M 1～3号周溝址  
図版56 S M 11号周溝・溝址・グリット・表探  
図版57 H 2～H 30号住居址（1：1）  
図版58 H 23～H 30号住居址・掘立柱建物址・土坑（1：1）  
図版59 周溝・グリット・IEO V H 1・H 2号住居址  
図版60 IEO I H 1号住居址  
図版61 IEO I H 1・H 2号住居址  
図版62 IEO I H 2・H 4号住居址・周溝址  
図版63 IEO V H 4・H 1号住居址  
図版64 IEO V H 1号住居址  
図版65 IEO V H 2号住居址・開通後の円正坊遺跡IV

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査の経緯

円正坊遺跡は佐久市岩村田地籍にある、小海線岩村田駅の西にある。この遺跡は考古学的に由緒のある遺跡で、昭和9年刊行の八幡一郎著『北佐久郡の考古学的調査』(P131—先史時代後期の遺跡—岩村田駅付近の堅穴)において、すでに登場している。

「岩村田町付近一帯の地が遺跡に富むことはすでに知った所である。佐久鉄道の敷設、中学校及女学校の地均等の大工事に際してはもとより、土地開墾にあたって暴露される堅穴の数は極めて多く、その都度多数の土器が見出された。佐久鉄道株式会社岩村田駅付近にも再三斯かる機会があった。神津猛氏の注意に基づき、本教育会郷土研究部委員は、昭和5年6月該所の調査を行い、その一部を調査した。」とこのように述べられ、昭和5年に発掘調査が行われた地である。

また、昭和59年には日本道路公団の建物の建築に伴い円正坊I地点が発掘調査され、堅穴住居址、円形周溝が検出されている。今回、都市計画課により都市計画道路佐久駅蓼科口線道路改築工事が着工されることとなり、遺跡の破壊が余儀なく、発掘調査を行い記録保存する運びになり、佐久市教育委員会文化財課が担当した。

遺 跡 名 批杷板群円正坊（えんしょうぼう）遺跡IV（略号 IEONIV）

所 在 地 佐久市岩村田字円正坊1289-1他

調査委託者 佐久市都市計画課

開 発 事 業 都市計画道路佐久駅蓼科口線道路改築工事

発掘調査期間 平成11年5月6日～平成13年10月26日

整理調査期間 平成11年8月23日～平成14年3月31日

調査面積 4,200m<sup>2</sup>



## 第2節 調査体制

調査受託者

教育長 依田 英夫（平成11・12・13年度4～6月）高柳 勉（平成13年度7月～）

事務局

教育次長 小林 宏三（平成11・12・13年度4・5月）黒沢 俊彦（5月～）

文化財課長 草間 芳行

文化財係長 萩原 一馬（平成11・12・13年度4・5月）森角 吉晴（平成13年度5月～）

文化財係 林 幸彦 須藤 隆司 小林 真寿 羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学

山本 秀典 出澤 力

調査主任 佐々木 宗昭 森泉 かよ子

調査副主任 堀 益子

調査担当者 森泉 かよ子

調査員

小川川 荘 小金澤たけみ 小林百合子 小山 功 佐藤 愛子 中島フクジ 中島 良三 中島 里佳

中條 悅子 花里四之助 花里三佐子 林 美智子 細谷 秀子 水間 雅義 柳澤千賀子 山浦 豊子

土屋 千浩 小林よしみ

## 第3節 調査日誌

平成11年度（1999）

5月 6日～5月10日

円正坊の発掘調査に入る。

円正坊に重機を入れ、下段にトレーナーを設定し  
遺構の有無を確認。

すでに削平され遺構なく耕土置き場とする。

5月11日～6月17日

調査区に置かれていた耕土の搬出、駐車場に敷  
いてあった砂石の搬出を始める。

重機・ダンプにより耕作土の除去、遺構面検出  
面まで下げ始める。

5月13日

調査員現場に入る。建物による搅乱が多く、駐  
車場跡は板压され非常に締まり遺構の検出作業が  
困難。基準杭設定始める。

5月14日

搅乱の除去・遺構掘り下げに入る。

掘立柱建物跡の柱穴の平面プランは椿円形、断  
面は覆土の上に地山のローム層がのっているとい  
う初めてのケースに戸惑う。

遺構上部または床面付近でスライドし西方向に  
ズレをきたしていることを確認。地盤状況ごとに  
違うため個々の地盤のズレ把握しきれない。

5月18日

風が強く、乾燥のため耕土除去の際にはこりが  
舞い、苦情あり。

7月12日～15日

雨のため土器洗い。



（平成11年5月 北より）



（平成11年5月 南東より）



（平成11年7月 H7号住居址 南より）

- 8月2日 調査を進めながら清掃に入る。
- 8月4日 住居址・周辺の土ふるいを始める。
- 8月9日 発掘調査・清掃・土ふるいを終了し、機材の撤収を行う。
- 8月10日 現場の道具整備後、土器洗いを始める。
- 8月11・12日 ラジコンヘリにて、遺跡の航空撮影・航空測量を行う。音がうるさいとの苦情あり。
- 8月17日～8月21日 重機・ダンプで、遺跡の埋め戻し・整地を行う。
- 8月23日～8月25日 土器注記作業。
- 1月7日～1月13日 図面修正を行うが、ズレによる遺構の表記に苦慮する。
- 平成12年度
- 4月26日～5月31日 室内整理作業。土器注記・図面修正。
- 6月1日～6月23日 一部土器接合し、石膏を入れ、土器実測。
- 7月5日 調査区西端に道路工事用通路造成のため、一部トレンチを入れ、遺構確認する。  
遺構遺物なし。
- 10月26日～1月12日 土器接合後、実測用に土器に石膏を入れ、土器実測。遺構図のチェックを行う。
- 12月19日～25日 現場調査に入る。東側調査区H地点に重機・ダンプを入れ、調査区に積まれた耕土・廃棄物の除去を行う。耕作土を除去し遺構検出をする。  
凍結防止のため、遺構検出地点には再度土を乗せる。
- 1月15日 ビニールハウスを建てて現場の調査に入る。  
朝方雪が降り、-16°と冷え込む。  
耕作土を除去しながら検出作業を行う。ハウス内でも地表面は凍結。朝方は作業困難。  
基準杭設定。
- 1月18日～25日 調査区西側のI地点に重機を入れ、耕作土の除去・搬出後、検出し、凍結防止のため一旦埋め戻す。東端のG地点に重機を移動し、耕作土の除去・搬出後検出し、凍結防止のため埋め戻す。



(平成11年8月 平成11年調査地点 南より)



(平成12年7月5日 西端にトレンチ設定 東より)



(平成13年1月 H地点 西より)



(平成13年1月 I地点 東より)

- 1月22日 調査区D地点の雪を除去後清掃し全体撮影。
- 1月23日～2月16日 機材撤収・図面の整理を行う。  
土器洗い・土器注記・土器実測・図面修正を行う。
- 2月1日・2日 G地点耕土除去・機材搬入。
- 2月5日 一部調査員でG地点の現場調査に入る。
- 2月15日 重機によりI地点の耕土除去・搬出を行う。  
朝は凍結、日中はぬかるむという状況。
- 2月19日 ハウスをかけてI地区に調査員に入る。  
基準杭設定。
- 2月26日 G地点のビニールハウス撤去。I地区は土曜日の雨のため浸水。陥没する。
- 2月28日 G地点調査終了。清掃して、全体撮影をする。
- 3月1日 西端のK地点の耕作土の除去。
- 3月5日 I地点のハウスを撤去し、ハウス外の造構の検出作業。また、昨日の雪、氷の除去。全体清掃、撮影を行う。
- 3月6日 I地点ズレの残りを調査し、終了。  
K地点の検出を行う。
- 3月19日 K地点の調査を終了。機材撤収を行う。
- 3月26日 繼続していた室内整理作業の平成12年度は終了する  
(平成13年度)
- 4月1日 昨年度に引き続き、室内整理作業を始める。
- 5月24日 現場作業に入る。残っていたD・J地点の表土の除去・搬出を重機・トラックで始める。
- 5月28日～6月11日 調査員が入り現場の発掘調査に入る。  
住宅の跡地のため搅乱が多く、造構の検出が困難である。また造構のズレが大きく、わからない。  
11日に清掃し全体の写真撮影。
- 9月1日 D地点の北、一部残った部分と道路の耕土除



(平成13年1月 D地点全景 北より)



(平成13年3月 K地点 北より)



(平成13年6月 D地点 西より)



(平成13年6月 D・J地点全景 東より)

去・搬出を重機で行い始める。

9月6日

現場に調査員に入る。遺構検出を行う。

9月10日

台風による記録的大雨のため現場は水没。浸水部に土壌を積み、崩壊浸水を防ぐ。

9月12日

現場を再開し、埋もれたや溜まった水の除去から始める。

9月18日

埋め戻しを終了し、現場での作業は本日で終了

10月23日～10月26日

最終の調査地に重機を入れ、耕土除去後発掘調査に入る。植木の搅乱と、遺構のズレのため解りづらい調査であった。

3月31日

引き続き室内整理作業を行い報告書を刊行する



(平成13年8月 室内作業)



(平成13年10月 D地点 最後の調査地点 東より)

#### 第4節 調査結果の概要

弥生時代後期または末～古墳時代初頭の円形・方形の周溝、古墳時代中期・後期の堅穴住居址と掘立柱建物址、平安時代の堅穴住居址と掘立柱建物址、中世から近世の道路址等が検出されている。中心は古墳時代の集落址である。近年の構築物による破壊が各所にあり、遺構が擾乱され、調査の執行状況に影響を与えた。本遺跡では遺構が中位で西北方向にずれる地盤の水平移動があり、ズレは池盤や遺構の深さ・規模に左右され、0～100cm 移動している。従って、ズレのある遺構は住居址が水平方向に分断されているため一棟の住居址・掘立柱建物址を2回調査した。また移動した厚いロームに覆われたため、掘立柱建物址の柱穴などは検出しきれず、写真や図面、そして予算の都合上移動した部分の調査にとどまる遺構もある。

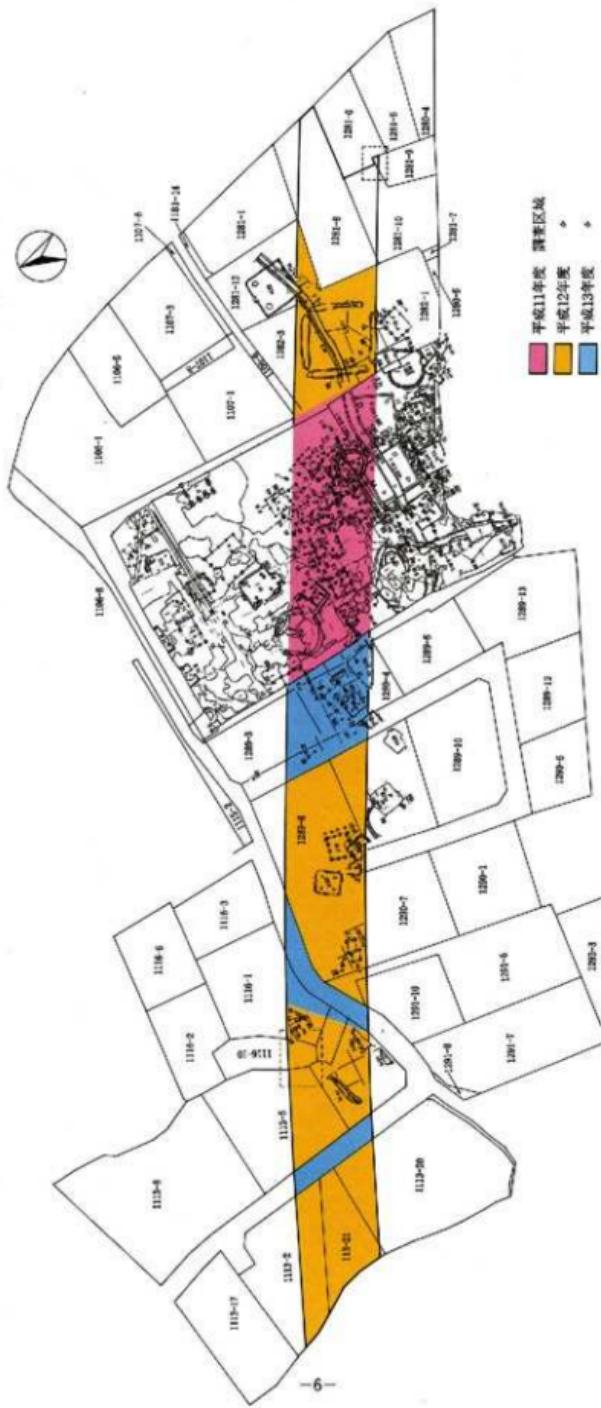
##### 検出遺構

古墳時代中期・後期 堅穴住居址	27棟	中世～近世	溝（道路址含む）	3本
平安時代	4棟	弥生・古墳	♪	2本
古墳時代 掘立柱建物址	21棟	古墳時代・不明	土坑（井戸址含む）	3基
単独ピット	104個			
弥生時代後期 方形周溝	3基			
♪ ～古墳時代初頭 円形周溝	7基			
古墳時代後期 古墳周溝	1基			

##### 主な出土遺物

弥生式土器	瓶・壺・杯・高杯
土師器	杯・高杯・鉢・丸脇壺・長脇壺・瓶
須恵器	杯・壺・壺
陶磁器片	青磁碗・白磁碗
鉄製品	鉄鎌・刀子・鍔・鐵滓
石製品	石製模造品（劍・鏡）・白玉・管玉・勾玉・スリ石・韁物石・石鎧
炭化物	柱・屋根材・カヤ状炭化物・木の実
古銭	寛永通寶・半錢
骨	

第2図 円正坊遺跡 IV遺構配置図 (1 : 1,000)



## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

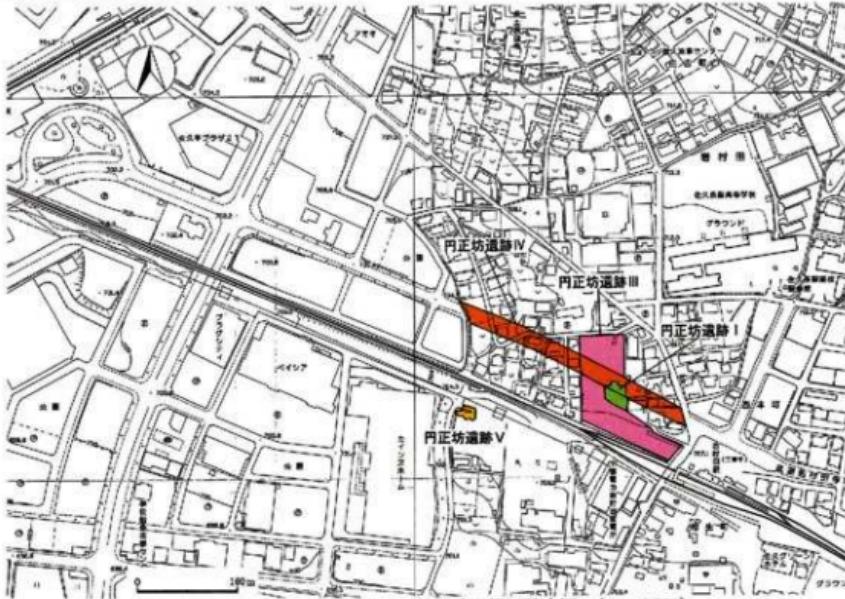
円正坊遺跡Ⅳは小海線岩村田駅の東、標高708~709mを測る地点にある。佐久市の北中央に当たり、岩村田の台地西縁に位置する。この地域は1万4千年~1万1千年前頃の浅間火山噴出物である浅間第1軽石流（P1）が地盤に堆積している所である。

浅間山南麓の末瀬部に位置するこの地域は、火山山麓特有な田切り地形が発達している。この軽石流堆積物は固結凝集が不十分で水の浸食に極めて弱く、小さな川でも浸食されて田切り地形を形成しやすいのである。これらの田切りは、御代田方面（佐久市北東隣接町）から南北方向に放射状に伸びている。円正坊遺跡も浅間火山がもたらした浅間1軽石流（P1）が厚く堆積している点である。南西方向に伸びる田切りは台地状を成し、台地上には集落跡が残されている。佐久市の北から周防畠遺跡群、芝宮遺跡群、長土呂遺跡群、枇杷坂遺跡群、岩村田遺跡群となっている。

円正坊遺跡Ⅳはこの浸食された台地状の遺跡群の一つである枇杷坂遺跡群南西端部に当たっている。（円正坊遺跡群も枇杷坂群遺跡群の南に伸びる延長上の台地にあるため枇杷坂遺跡群で一括する）西には渓り川が南流し、東は久保田用水を挟み岩村田遺跡群がある。南西方向に伸びる台地の西端は低地に望み、田切りは消滅して行く。低地では、弥生から現在の水田まで各時代の水田界（溝跡）が確認されている。

今回報告しているように本遺跡では地盤のズレがみられる。現在この地盤のズレが確認されているのは、本遺跡の周辺に限られ1~5円正坊遺跡Ⅰ~V、7清水田遺跡Ⅲ、8直路遺跡Ⅰ~Ⅲで確認されている。この地点は台地の西端で低地に望むことから、地滑りによる地盤のズレが考えられ、台地縁辺での現象とみられる。

岩村田の西隣長土呂地区では長野新幹線の開通、伴う区画整理、国道141号バイパス開通など開発が多い地域である。第4図周辺遺跡分布図で示したように所々ではあるが、岩村田周辺の古代の様子が顕在できる状況になっている。



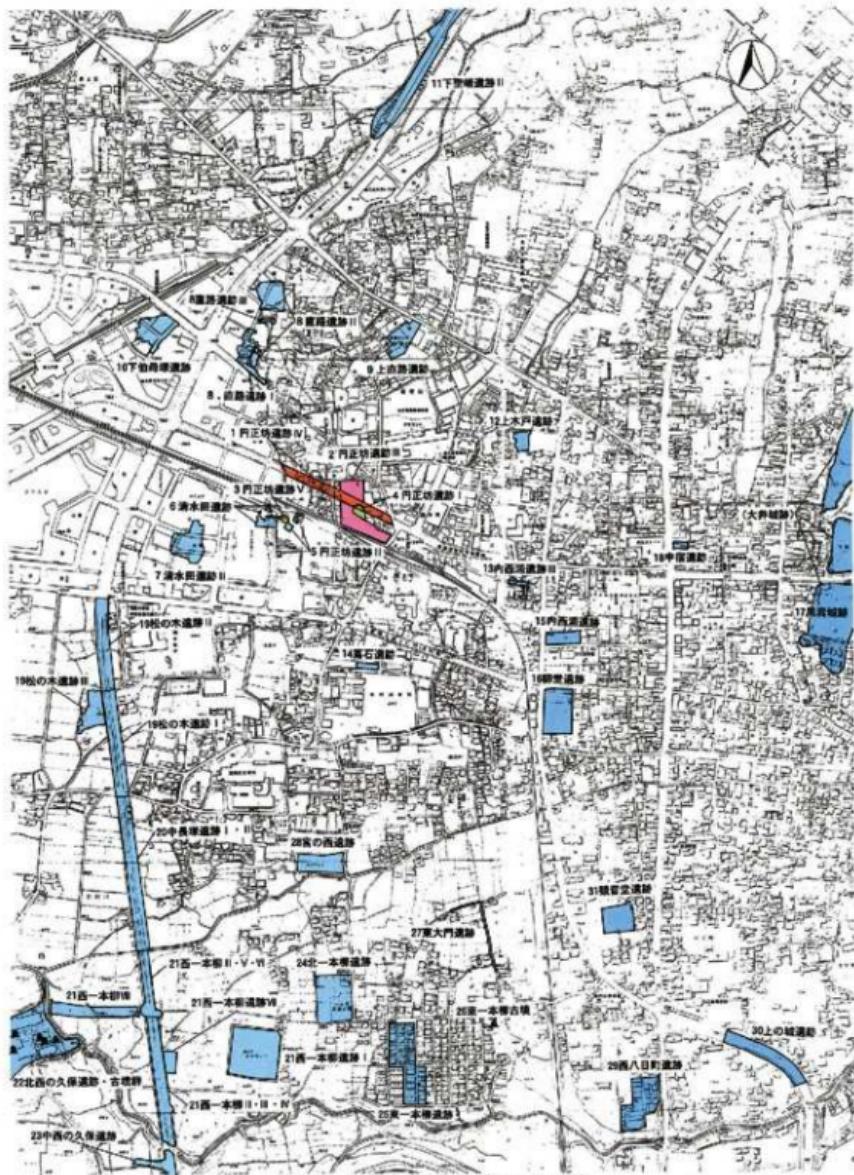
第3図 円正坊遺跡発掘区設定図 (1 : 5,000)

円正坊遺跡では本遺跡を含め5回にわたって調査がなされ、円正坊遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳでは古墳時代中期から後期、平安時代の住居址、弥生後期～古墳時代の周溝が検出され、小海線の南、本遺跡から南西に200～300m地点の円正坊遺跡Ⅱ・Ⅴ地点では弥生時代中期・後期堅穴住居址が構成に加わる。西に隣接する清水田遺跡では、弥生時代中期1棟・後期10棟、古墳時代中期3棟の堅穴住居址、土壙墓、溝が検出された。さらに南西方向の清水田遺跡Ⅱには弥生時代後期の堅穴住居址9棟、溝がある。本遺跡の北西には8直路遺跡Ⅰ～Ⅲが調査され、弥生時代後期堅穴住居址がある。このうち6清水田遺跡を除いて、地盤の水平方向のズレが遺構で確認された。14萬石遺跡では弥生後期の土器棺墓が1基が検出されている。

円正坊遺跡Ⅳの中心である古墳時代中期から後期の遺跡について周辺での遺跡分布をみてみることにする。北では11下聖塔遺跡では弥生時代後期4棟、古墳時代中期13棟、古墳時代後期25棟、奈良～平安時代16棟が検出されている。古墳時代中期は本遺跡と同様の土器構成がみられる。17黒岩城跡では15棟の堅穴住居址が検出され、6棟が古墳時代中期、9棟が古墳時代後期である。この構成は円正坊遺跡Ⅳと類似し、焼失家屋が2棟ある。13の内西浦遺跡Ⅲにおいても古墳時代中期の堅穴住居址と、大量の土器が出土している。そしてさらに南下して湯川沿いには弥生中期～古墳時代、平安時代にわたる一本柳遺跡群の集落が展開している。中でも北西の久保遺跡では弥生中期～後期の堅穴住居

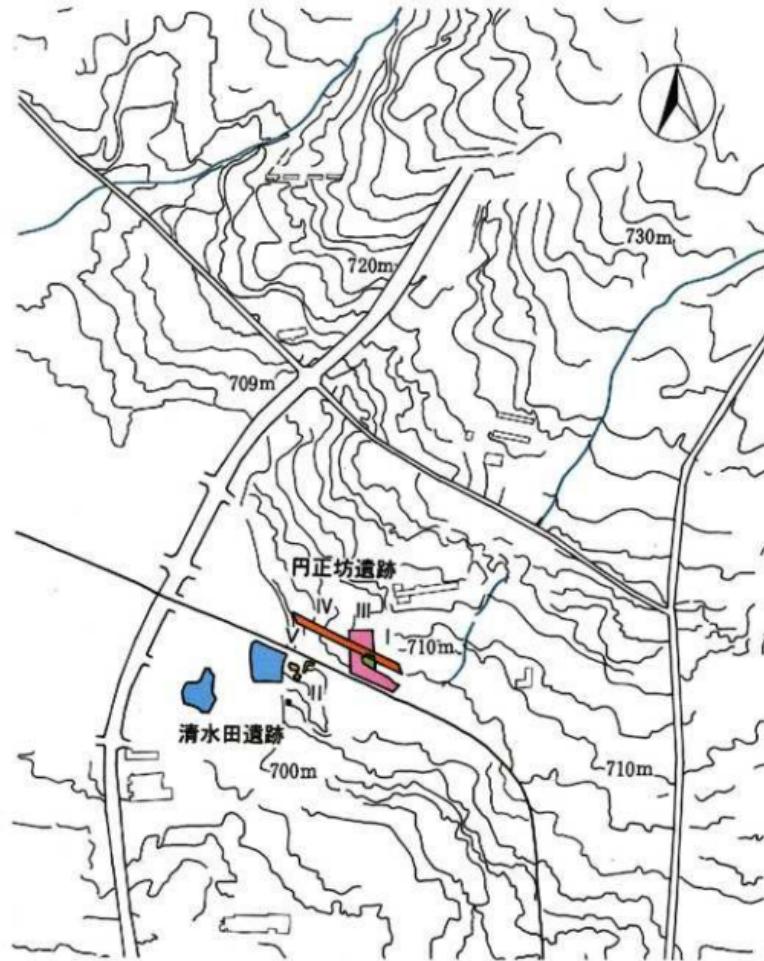
第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	立地	時代	発掘調査年度・備考
1	枇杷坂遺跡群円正坊遺跡Ⅳ	岩村田字円正坊外	台地	古～平	平成11～13年・本調査
2	タ円正坊遺跡Ⅲ	岩村田字円正坊外	台地	古～平	平成11年
3	タ円正坊遺跡Ⅴ	岩村田字円正坊外	台地	弥・古	平成11年
4	タ円正坊遺跡Ⅰ	岩村田字円正坊外	台地	弥～古	昭和59年
5	タ円正坊遺跡Ⅱ	岩村田字円正坊外	台地	弥～古	平成8年
6	タ清水田遺跡	岩村田字清水田	台地	弥・古	昭和53年
7	タ清水田遺跡Ⅱ	岩村田字清水田	台地	弥・古	平成10年
8	タ直路遺跡Ⅰ～Ⅲ	長土呂字直路	台地	弥・中	平成9～11年
9	タ上直路遺跡	岩村田字上直路	台地	弥	昭和60年
10	下伯母塚遺跡	長土呂字下伯母塚	台地	弥～古	平成9年
11	長土呂遺跡群下聖塔遺跡Ⅱ	長土呂字下聖塔	台地	弥～平	昭和63年
12	岩村田遺跡群上木戸遺跡	岩村田字上木戸	台地	繩・弥・平	平成13年
13	タ内西浦遺跡Ⅲ	岩村田字内西浦	台地	弥・古	平成12年
14	枇杷坂遺跡群鳥石遺跡	岩村田字鳥石	台地	弥	昭和63年
15	岩村田遺跡群内西浦遺跡	岩村田字内西浦	台地	中	平成元年
16	岩村田遺跡群柳堂遺跡	岩村田字柳堂	台地	弥・平・中	平成10・12年
17	黒岩城跡(大井城跡)	岩村田字古城	台地	古・中	昭和59年
18	岩村田遺跡群中宿遺跡	岩村田字中宿	台地	古・近	平成9年
19	松の木遺跡Ⅰ～Ⅲ	岩村田字松の木	台地	弥・古	平成8・9年
20	中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱ	岩村田中長塚	台地	中・近	平成8・10年
21	一本柳遺跡群西一本柳遺跡1～Ⅳ	岩村田字西一本柳外	台地	弥～中	平成3～平成13年
22	北西の久保遺跡・古墳群	岩村田字北西の久保	舌状台地	弥～中	昭和44・45・57・60年
23	中西の久保遺跡	岩村田字中西の久保	河岸段丘	古～平	平成7年
24	一本柳遺跡群北一本柳遺跡	岩村田字北一本柳	台地	弥・平	昭和47年
25	タ東一本柳遺跡	岩村田字東一本柳	台地	弥	昭和43年
26	タ東一本柳古墳	タ	台地	古	昭和46年
27	タ東大門遺跡	岩村田字東大門	台地	弥・平	平成元年
28	宮の西遺跡	岩村田字宮の西	台地	弥～中	昭和58年
29	上の城遺跡群西八日町遺跡	岩村田字西八日町	台地	弥・奈～平	昭和58年
30	タ上の城遺跡	岩村田字上の城	台地	古～平	昭和48年
31	タ觀音堂遺跡	岩村田字觀音堂	台地	平・中	平成9年



第4図 周辺遺跡分布図 (1 : 10,000)

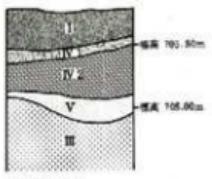
址128棟、古墳時代中期の堅穴住居址19棟、平安時代の堅穴住居址7棟と埋床棺墓と円形の周溝が17基検出された。古墳時代中期の堅穴住居址と円形の周溝はほぼ同期であり、東に居住域、西に基域という空間が設定されていたことが判明している。S17周溝からは人物や鳥などの形象埴輪が出土し、長野県内では稀少例で貴重なものとなっている。この東に続く西一本木遺跡では古墳時代中期の住居址が9棟検出される。この古墳時代中期の遺構はこの岩村田から南西の地にもみられることがわかるが、この時代が佐久地域で、どの程度の分布を示すかというと、今のところ湯川・千曲川流域の近接地域に限られるようである。



第5図　円正坊遺跡周辺地形図（1：10,000）

### 第Ⅲ章 基本層序

円正坊道路は浅間第1軽石流（P1）が地盤なし、造構は浅間第1軽石流（P1）中に構築している。調査区西端では低地にさしかかり、水田着がみられた。



第Ⅰ層	耕作土
第Ⅱ層	黒褐色土層 (10YR2/3) 漸移層 ～5mm 大バミス・ローム粒子含む。
第Ⅲa層	にぶい褐色土層 (7.5YR4/3) 浅間第1軽石流 (p1)。
第Ⅲb層	にぶい橙色土層 (7.5YR6/4) 浅間第1軽石流 (p1)
第Ⅲc層	にぶい黄褐色土層 (10YR5/8) 浅間暗褐色ロームを含む。
第Ⅲd層	にぶい褐色土層 (7.5YR5/4) 浅間第1軽石流 (p1)
第IV 1層	黒褐色土層 (7.5YR3/2) 水田層。鉄分層
第IV 2層	黒褐色土層 (7.5YR3/2) 水田層。
第V層	暗褐色土層 (7.5YR3/3) 砂質土。

第6図 基本層序模式図



H30号住居址東壁（南より）

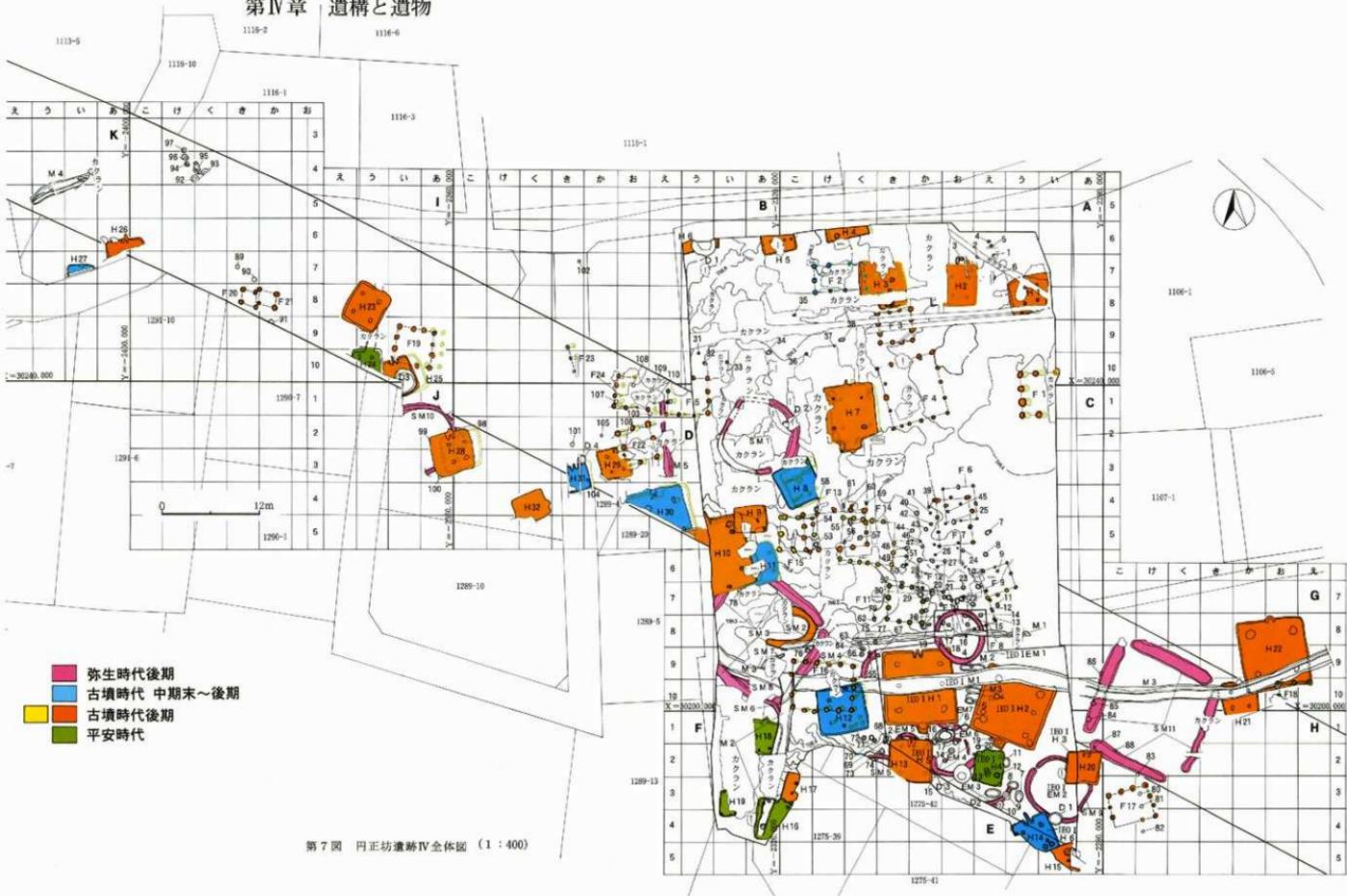


西端水田地点（南より）

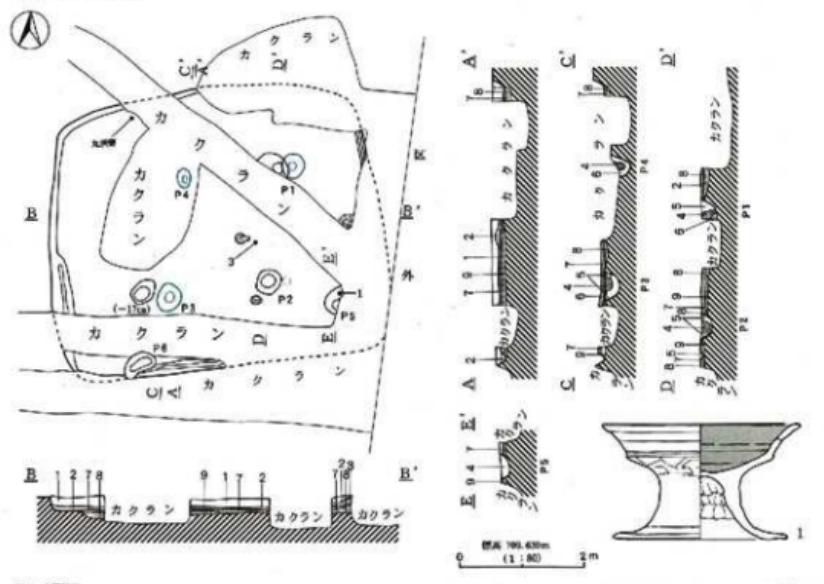
第6図で示したように地盤のズレが観察でき、H30号住居址の東壁を例に示した。浅間第1軽石流が2～3段階にわたって、ズレている様子が窺える。ズレの下面には潜水した際の鉄分堆積層がみられる。このズレは、その地盤や、それより先、西方向の状況（住居址の覆土で地盤がゆるいままたは床面付近がズレの位置に当たる等）により異なるようである。このズレが何時起きたかということであるが、平安時代の住居址であるH16・H18号住居址、中世以降であろうM1の道路址にはみられず弥生時代後期～末の方形・円形の周溝はずれていることなど参考にすると、平安時代より以前と言いうことができよう。ただし、東端のH21・22号住居址、SM11号周溝址はズレの層が造構構築面より下層であるためか、造構のズレはみられない。



第Ⅳ章 | 遺構と遺物



## 1. 穴住居址



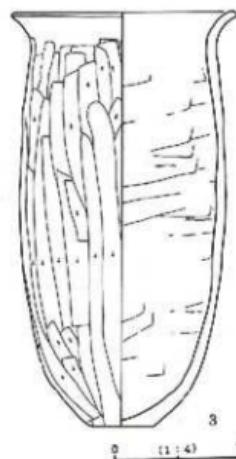
第8図 H1号住居址

### 1) H1号住居址 (第8図、第2表、図版1・34)

調査区北東のAの17グリットにあり、擾乱が随所にある上、駐車場に利用され転圧をうけ、非常に繊まり、土器も押圧状態で検出された。また、地盤のズレのため、床面で西に40cm程度移動した位置で検出された。しかし東側が擾乱され、明確に東壁で住居址のズレを示すセクションは確認できなかった。地盤のズレの認識がなく東西にセクションを設定しなかったのでピットのズレは平面図に示されるのみである。推定で南北428cm、東西420cmを測る方形の住居址で、擾乱のため明確ではないが東壁側に粘土・焼土がみられるところから東壁にカマドがあったものと推定される。主軸方位はN-80°-Wを測る。床面は転圧を受けたこともあり、縫まっていた。柱穴は西に傾斜しており、なおかつ、中位でズれていた。

出土遺物には弥生式土器と土師器がある。弥生式土器は小片で図示できなかつたが微影された高杯、頸部に模様T字文の壺、波状文の壺片がある。

土師器杯は小片で図示できなかつたが、実測遺物には土師器高杯・小型壺・長胴壺がある。



0 (1:4) 10cm

1の高杯はP 5からの出土で、やや短脚で太い頸部に有段口縁杯がのったもので杯下部には稜を有し、口縁部は沈線状の段をもって外傾外反する。薄手で端正にできているがゆがみが著い。北西に丸胴壺の頸部が出土しているが高杯と同様の胎土、色調を呈しうがきが施されている。3は長胴壺で、頸部外面はヘラケズリされ、肩下部丸みをもつて底部に至る。

これらより、古墳時代後期の住居址と位置づけられよう。

第2表 H 1号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法蓋	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 高杯	(15.6) 03.7 9.1	内 頸部 ふこみ部ナダ→口縁部横ナダ→ 黒色处理 外 頸部 滾部横ナダ→胸柱部ナダ 底ナダ・底蓋部ヘラナダ (黒色处理か)	口縁部1/3、底部3/4残存 内 N4/6(灰) 外 7.5YR4/1(灰灰)	緻密。 粘土のような白黄色粒子、小石 含む。 ゆがみ著しい。	
2	土師器 小型壺	(15.0) — (8.3)	内 頸部ナダ→口縁部横ナダ 外 口縁部横ナダ・頸部底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 7.5YR7/3(にじい焼) 7.5YR5/2(灰場) 外 5YR2/3(にじい焼)	1mm以下の赤色粒子、石英、長 石粒子、黑色粒子含む。	
3	土師器 壺	(17.9) 4.9 33.2	内 口縁部横ナダ・頸～底部横ナダヘラナダ 外 口縁部横ナダ→頸・底部ヘラケズリ	底部底部1/3残存 内 7.5YR7/3(にじい焼) 外 7.5YR7/3(にじい焼) 7.5YR5/2(灰場)	2mm以下の石英、長石粒子、赤 色粒子含む。 1mmの黑色粒子を少含む。	

## 2) H 2号住居址 (第9・10図、第3表、図版1・34)

Aえ7グリットにあり、西側は擾乱により大きく壊され、東も細く深い擾乱が4本入り込んでいる。また地盤のズレのためかカマドの煙道が中央に残り、カマド本体は中央ではなく東壁との中间の位置で検出されている。ズレが床面と柱穴中位で起きたものと推測されるが、明確なことはいえない。

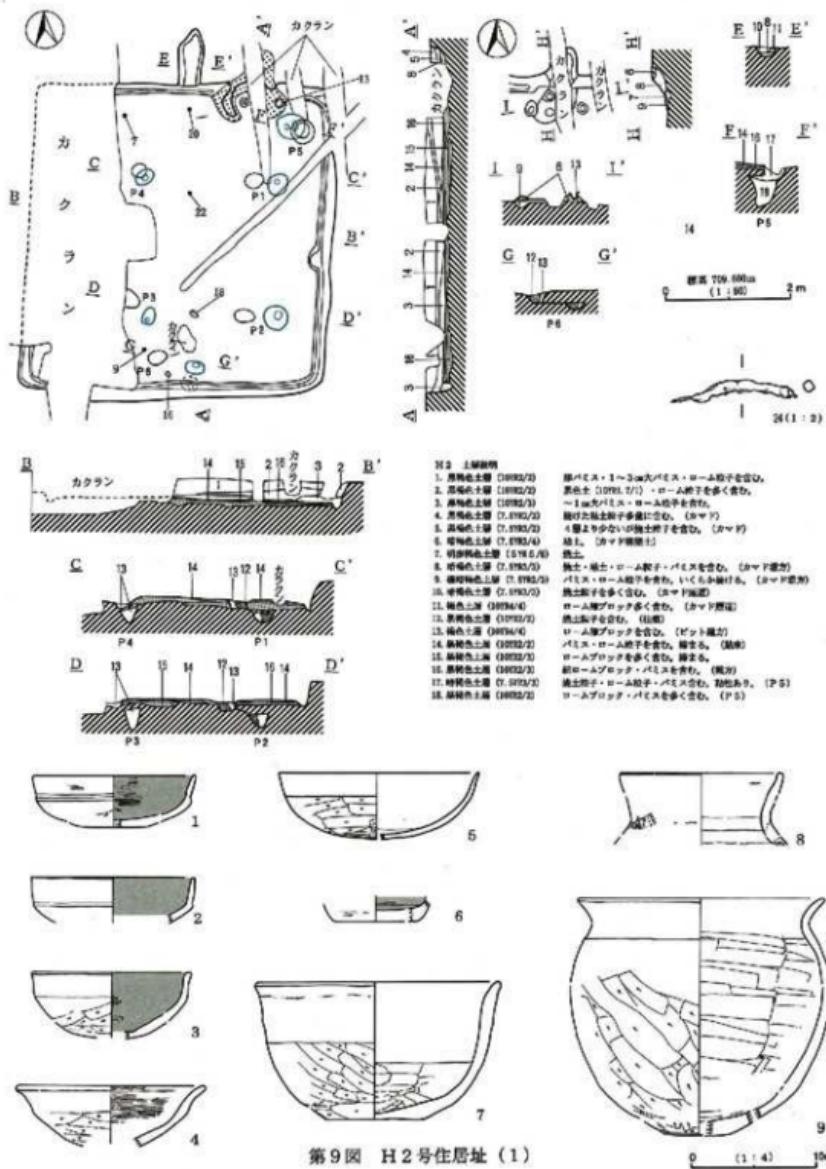
南北長460cm東西長458cmを測り、方形を呈す。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-4°-Eを指す。カマドは暗褐色を呈す粘質土で構成されている。カマド火床にはわずかに燒土がみられたが、擾乱のため全容は明らかでない。中央に残った煙道部は良く焼けていた。床面は縮まるが、移動をしたために硬化した可能性もあり、床面とした14層は煙道が硬化したためであるかもしれない。床面で検出されたビットと場所で検出されたビットを示したが、全般に西に移動している。しかしカマドと、その東下のP 5をみると、東に移動した様子が窺える。従って、一様なズレではなかったようである。

出土遺物には繩文式土器・弥生式土器・須恵器・土師器・礫物石・滑石製白玉・土製丸玉・滑石製石製模造品の未製品、鉄製品がある。繩文式土器は繩文中期後半の深鉢で曾利I・II式があてられる。弥生式土器はいずれも破片であるが拓本で示したほかに赤色彫形の壺・高杯・杯の破片が多い。

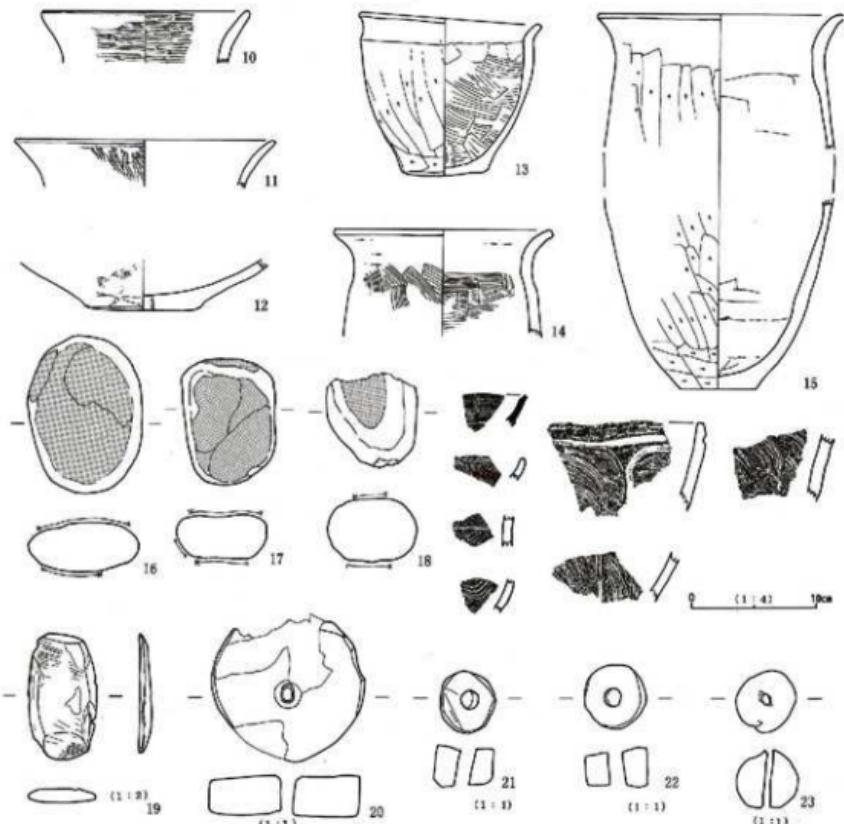
須恵器は拓本に示した須恵器底の口縁部片があるのみである。土師器は杯・鉢・小型壺・丸胴壺・長胴壺がある。杯は2の須恵器底蓋の模倣品で、丸底外面に稜を有して口縁が直立する1・2、器高が深く口縁部は明確な稜を



H 2号住居址 (南より)



第9図 H2号住居址 (1)



第10図 H2号住居址(2)

持たないまま外反する3・4、口縁部がやや直立する程度で、明確な外縁を持たない5の杯等がある。7・9はは内面にミガキ調整されないが黒色処理をされたのではという色調をしている。(明確でないので処理の図示はさけた。) 15の長胴甕は胎土の石英・長石粒が5mmほどの物が混入し、粗い。13の小型甕はカマドの東脇から出土した物であるが内面はハケ目状の調整がのこり、14の長胴甕の内外にもハケ目状の調整がみられる。

24の鉄製品はⅢ区で出土しており、搅乱が多く本住居址に伴うかわからない。

これらより、本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第3表 H2号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	(13.0) (12.4) (4.1)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部ミガキ(?)・底部ヘラケズリ	口縁部一部のみ残存 内 2.5YR3/1 (暗赤灰) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mmの赤色粒子少量含む。 磨耗著しい。	IV区
2	土師器 杯	(13.2) (12.8) (3.6)	内 横ナデ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ(→黒色 処理?)	口縁部一部のみ残存 内 5YR3/1 (黒褐) 外 5YR2/1 (黒褐) 断 10YR7/2 (にぶい黄褐)	1mm以下の中黒色粒子少量含む。 きめ細かい。 外面、磨耗著しい。	IV区
3	土師器 杯	(12.8) — (5.2)	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ・部体ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 5YR2/1 (黒褐) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mmの赤色粒子、黒色粒子を含む。 1mm以下の石英・長石粒子を含む。 外面、磨耗著しい。	I区3層 IV区、II区
4	土師器 杯	(15.1) — (4.8)	内 ミガキ(→黒色処理か?) 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 5YR3/3 (にぶい赤褐) 外 5YR7/2 (明褐灰)	1mmの赤色粒子含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	I区1層 IV区
5	土師器 杯	(16.1) — 5.3	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ 外 口縁下部→底部ヘラケズリ→口縁部横 ナデ	口縁部3/4残存 内 2.5YR7/4 (淡赤褐) 5YR3/3 (にぶい赤褐) 外 2.5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子、小石含む。 磨耗している。	II区、IV区
6	土師器 小鉢	— (6.6) (2.0)	内 ミガキ→黒色処理 外 ロクロナデ→底部ヘラナデ→削部一部 ミガキ	底盤1/4残存 内 7.5YR2/1 (黒) 外 5YR7/2 (明褐灰)	極小の石英・長石粒子少量含む。 検出	
7	土師器 鉢	(19.8) 7.8 11.0	内 斷→底部ナデ→口縁部・腹中央横ナデ (→黒色処理か?) 外 断・底部ヘラケズリ→口縁部・胴上位横 ナデ	底盤完形、口縁部1/8残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 7.5YR7/4 (にぶい橙)	1~3mmの赤色粒子多く含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黑色粒子少量含む。	II区、IV区
8	土師器 鉢	(13.0) — (5.7)	内 口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ハケナデ	口縁部1/8残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 2.5YR7/6 (灰)	1mm以下の黒色粒子、石英・長石粒子含む。 II区、III区、IV区、検出	
9	土師器 鉢	(19.8) (5.6) —	内 口縁部横ナデ→胴→底部ヘラナデ (→黒色処理か?) 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ	口縁部1/10、底盤1/2残存 内 10YR6/1 (褐灰) 5YR4/1 (灰) 外 2.5YR2/2 (灰白)	1mm以下の石英・長石粒子を含む。	
10	土師器 甕	(16.6) — (4.0)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/6残存 内 5YR3/3 (にぶい橙) 外 5YR6/3 (にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黑色粒子含む。	IV区、カマド
11	土師器 瓶	(20.7) — (3.7)	内 横ナデ→ミガキ 外 橫ナデ→ミガキ	口縁部1/8残存 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子 少量含む。	II区
12	土師器 甕	(9.2) — (4.1)	内 ナデ・一部ミガキ 外 底部および底部外周ナデ・胴部ミガキ	底盤1/4残存 内 7.5YR4/3 (にぶい橙) 外 7.5YR8/4 (透赤褐)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子、黑色粒子少量含む。	IV区
13	土師器 小烈甕	14.5 6.8 13.0	内 口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズリ 外 口縁部横ナデ・胴・底部ヘラケズリ	14は完形 内 7.5YR4/1 (褐灰) 外 5YR6/2 (褐灰)	2mm以下の赤色粒子多く含む。 外面磨耗。	
14	土師器 甕	(17.4) — (8.5)	内 口縁部横ナデ→胴部ハケナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ハケナデ	底盤1/4残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、少量含む。	I区3層 IV区
15	土師器 甕	(19.5) (6.0) —	内 口縁部横ナデ→胴→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・胴・底部ヘラケズリ	口縁部1/4、底盤1/2残存 内 2.5YR5/4 (にぶい赤褐) 外 2.5YR5/2 (赤灰)	1~2mmの赤色粒子、石英・長石粒子多く含む。 5mm以下の中石多く含む。	I区、II区2層 III区、IV区2層 I区1層
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考
16	搬石	12.5	9.3	4.0	640	安山岩。
17	搬石	10.0	7.5	3.6	410	安山岩。
18	こう打石・搬石	7.5	7.2	5.1	360	安山岩。
19	石製機造品	5.1	2.3	0.4	10.6	滑石製未製品。
20	臼玉	3.1	(2.9)	0.8	12.3	滑石。
21	臼玉	1.21	1.1	0.8	2	滑石。
22	臼玉	1.3	1.2	0.8	2.06	滑石。
23	土製丸玉	1.1	1.1	—	1.64	
24	鉄製品	(4.8)	0.4	0.4	1.6	

### 3) H 3号住居址 (第11図、第4表、図版)

本住居址はA-1-7グリットにあり、北中央と南側に大きな攪乱がある。住居址は浅間第1軽石流中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。地盤のズレもあり、住居址の全体がつかみきれない。南北490cm 東西522cm を測るが東西は移動した数値も含まれため、東西長488cm が本来の数値であろうが参考の数値である。カマドはA'A' セクションの北端に、焼土がみられたことから北壁にあったものと推測される。南壁に張り出しがもち、方形を呈する住居址であろう。主軸方位はN-0° で北を指す。地盤のズレにより、住居址が所々で異なったズレを示している。p 3は攪乱のために頭著に西にずれたピットが断面で確認された。床面は綺麗でいたが移動面もほぼ同じ高さであるため、余分に締まった可能性もある。

出土遺物には須恵器長頸壺(1)、土師器杯(2~5)・鉢(6)・丸胴壺(8~9)・小型壺(11)、瓶(7)、織物石(12・13)がある。

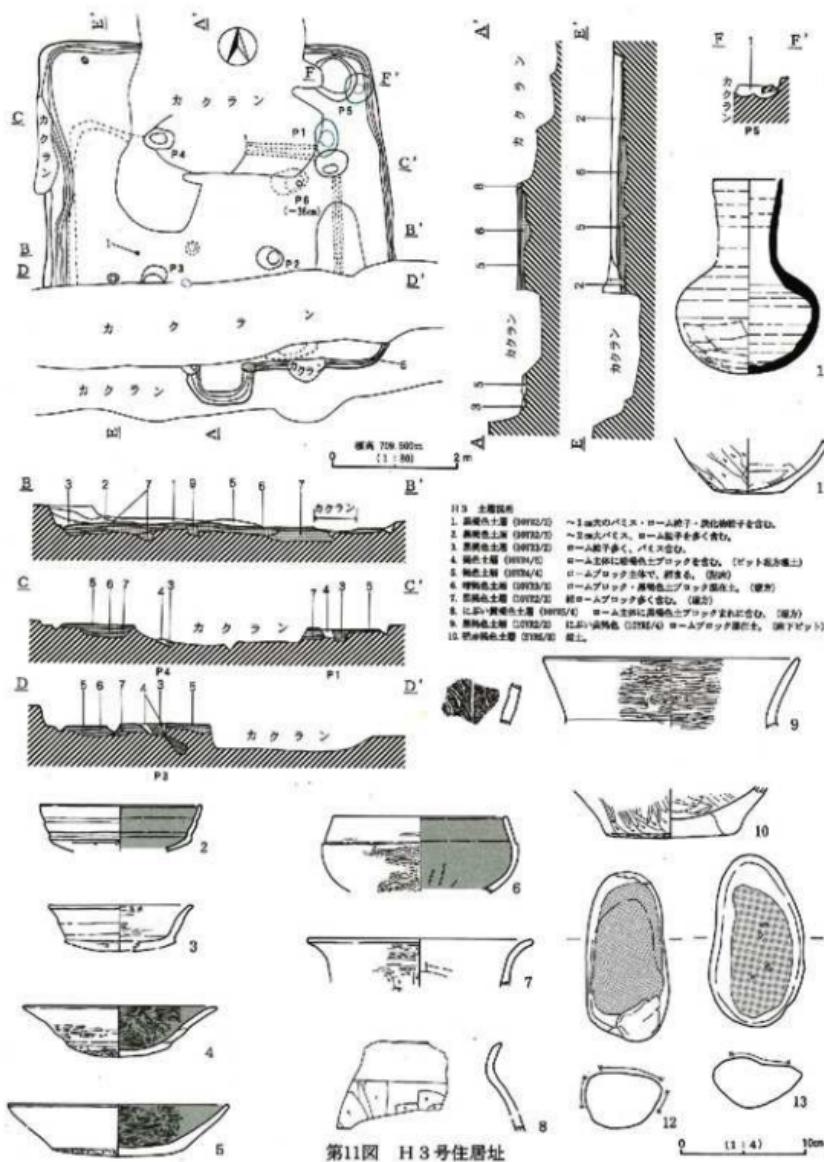
須恵器長頸壺は胴部中央に最大径を持ち、施文されず横ナデされる。体下部は回転ヘラケツリ後難なナデ調整が施される。胎土はまれに粗い長石粒を含む。土師器杯2は有段口縁の杯、4は小さな丸底から外縁と比較的明瞭な屈曲を持って口縁が外側向外反する。5はほぼ完形で、浅く平底に近い底部が内外面に明確な稜を持つて直線的開くものである。6は杯身模倣の小振りの鉢であり、内面に暗文が施される。7は瓶か鉢であろうが小片である。8は大振り鉢で外面は赤みを帯び赤色塗彩された痕跡がある。11はまだ器肉は厚いがヘラケツリが強く施された武藏臺タイプの壺底部である。

13・14の織物石は打痕やスリ面があり、織物石以外に多用された様子がある。

これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第4表 H 3号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 長頸壺	(5.6) — 15.4	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ→削下半→底部ナデ	底部完形、口縁部1/2残存 内 N6/0(灰) 外 N6/0(灰)	1mm以下の石英・長石粒子含む。 II区 II区東	
2	土師器 杯	(13.0) (11.5) (3.7)	内 横ナデ→黒色處理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケツリ 口縁部に2条の沈線を施す。	口縁部1/2残存 内 SYR2/1(黒褐) 外 SYR5/1(褐)	きめ細かい。	IV区
3	土師器 杯	(15.6) (8.8) 3.6	内 ミガキ 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケツリ	口縁部1/2残存 内 SYR8/4(赤褐) 外 SYR8/4(赤褐)	2mm以下の赤色粒子多く含む。	II区 (?)
4	土師器 杯	(15.6) (8.2) 4.0	内 ミガキ→黒色處理 外 口縁部横ナデ→一部ミガキ・底部ヘラケツリ	口縁部1/4残存 内 10YR1.7/1(黒) 外 5YR7/3(にぶい橙) 7.5YR7/1(黒)	0.5mm以下の石英・長石粒子を 少量含む。	検出
5	土師器 杯	(17.0) (10.6) 4.1	内 ミガキ→黒色處理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケツリ	口縁部1/4残存、底部ほぼ完形 内 7.5YR1.7/1(黒) 外 5YR7/3(にぶい橙)	きめ細かい。1mmの石英・長石 粒子、赤色粒子少量含む。 外縁、剥離著しい。	
6	土師器 鉢	(13.8) — (6.0)	内 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文→黒 外 底部ヘラケツリ→ミガキ→口縁部横ナ デ	口縁部1/8残存 内 10YR2/1(黒褐) 外 SYR5/1(褐)	歯密。 1mm以下の石英・長石粒子少量 含む。	検出
7	土師器 瓶	(18.2) — (3.7)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケツリ→ミガキ — 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケツリ (→赤色塗彩?)	口縁部1/12残存 内 SYR6/4(にぶい橙) 外 SYR6/4(にぶい橙)	きめ細かい。 1mmの赤色粒子含む。	I 区1層 II区
8	土師器 鉢	— — —	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ(→黒色処 理?) 外 口縁部横ナデ・胴部ヘラケツリ (→赤色塗彩?)	断片(口縁部が一部残る) 内 10YR2/1(黒褐) 外 2.5YR5/3(にぶい赤褐) 10YR2/2(灰白)	0.5mmの石英・長石粒子少量含 む。	検出
9	土師器 甕	(20.5) — (5.5)	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 SYR7/4(にぶい橙) 外 SYR7/4(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、赤 色粒子含む。	III区、織方
10	土師器 壺	— (10.3) (3.9)	内 ヘラナデ 外 ヘラケツリ→胴部ミガキ・底部ヘラケツ リ	底部1/4残存 内 SYR7/3(にぶい橙) 外 SYR7/3(にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、赤色 粒子、黒色粒子含む。	IV区
11	土師器 甕	— 5.6 (4.4)	内 ヘラナデ 外 ヘラケツリ	底部完形 内 10YR7/3(にぶい黄褐) 外 7.5YR6/2(灰褐)	1mm以下の石英・長石粒子、赤 色粒子含む。	I 区1層 II区1層
番号	種類	長さ	巾	厚さ	備考	出土位地
12	織物石	13.6	6.5	4.4	530	安山岩。打痕・スリ面あり。
13	織物石	13.8	7.7	4.0	485	安山岩。スリ面あり。



4) H 4 号住居址 (第12図、第5表、図版2・35)

A 6グリットにあり、住居址の大半は調査区域外で調査できなかった。住居址の南端にあたる南北間148cmを調査することができた。東西は520cmを測る。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。調査遺構内ではカマドは検出されていない。本住居址も壁が床面で30cm程西に移動していた。

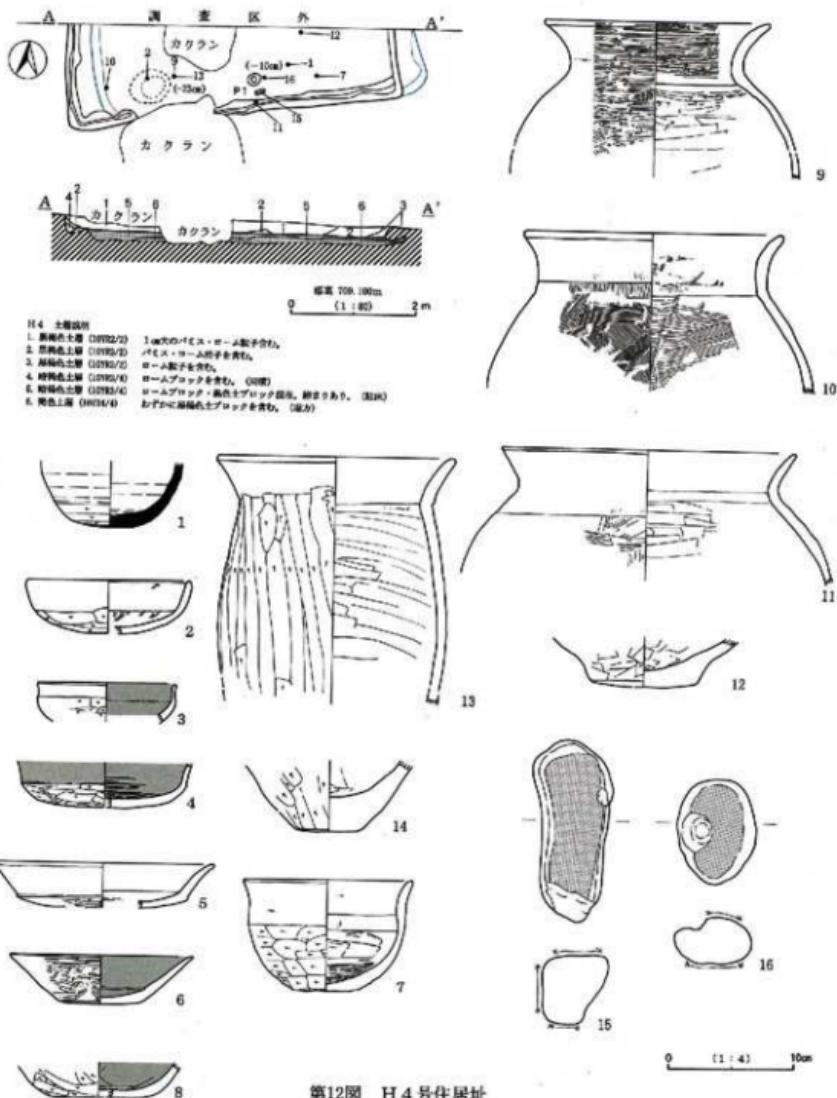
出土遺物は多く、須恵器壺(1)、土師器杯(2~6)・鉢(7~8)・丸胴壺(9~12)・長胴壺(13~14)・織物石(15)、軽石製の凹石(16)がある。

須恵器壺は胎土分析の結果、猿投系と鑑定され、色調的にも灰白色を呈し、内面にモスクグリーンの自然釉が付着している。体下部外面は回転ヘラケズリ調整される。2の杯は厚手でヘラケズリによって、口縁部との外縁が作られ口縁部との境が作り出されている。3・4は杯身の模倣杯なのであるうか丸底からわずかに屈曲し、口縁が直立気味な杯である。5は口縁が外径をもつて大きく外反している。外面は焼けた黒色を呈している。6は平底気味の底部から内外に稜を持って口縁部が直線的に外傾するもので、口縁部は丁寧にミガキ調整され、内面は黒色処理される。7は内面はナゲ調整のままであるが、器形から鉢とした。9~11は丸胴壺胴上半部であるが、調整が異なっている。9は口縁から胴部にかけて外面が丁寧にミガキ調整され、10は胴部はハケ目を残したままで、ヘラケズリ調整もされていない。11は胴部外面にヘラケズリされ、わずかなミガキ調整がある。13長胴壺は、胴部外面が丁寧にヘラケズリされ、14の底部は厚みをもっている。

これらの土器群は古墳時代後期に位置づけられよう。

第5表 H 4 号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器壺	— (5.2)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ→底部切り離し→底部と外周に回転ヘラケズリ	底部完形 内 N7/0(灰白) 外 N7/0(灰白)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少含む。 内外面に自然釉付着。	
2	土師器杯	(13.2) — 4.3	内 口縁部横ナデ・みこみ部ナデ→一部ミガキ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 5YR7/4(にぶい橙) 外 5YR7/4(にぶい橙)	1mmの赤色粒子多く含む。 石英・長石粒子少量含む。	
3	土師器杯	(11.2) — (3.2)	内 ミガキ→黒色処理 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/8残存 内 2.5YR1/2(黒) 外 7.5YR6/2(灰黒) 7.5YR7/4(にぶい橙)	きめ細かい。 1mmの赤色粒子、石英・長石粒子を少含む。	
4	土師器杯	— (13.2) (3.6)	内 口縁部横ナデ・みこみ部ナデ→ミガキ 黑色処理 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内 5YR5/3(にぶい赤褐) 外 5YR5/3(にぶい赤褐)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	
5	土師器杯	(17.8) (13.6) (3.6)	内 口縁部横ナデ(→黒色処理?) 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ (黒色処理?)	口縁部1/2残存 内 7.5YR8/4(浅黄褐) 外 10YR4/1(褐灰)	1mmの赤色粒子含む。	
6	土師器杯	(14.6) (6.6) 3.9	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ・底部ミガキ	口縁部1/3、底部1/2残存 内 10YR1.7/1(黒) 外 7.5YR6/3(にぶい褐)	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子含む。	
7	土師器鉢	(13.5) (5.3) 8.8	内 刷→底部ナデ→口縁部横ナデ 外 刷・底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4、底部1/3残存 内 5YR7/4(にぶい橙) 外 5YR7/4(にぶい橙)	1~4mmの赤色粒子を含む。 1mmの石英・長石粒子を少含む。	
8	土師器鉢	— (8.0) (2.9)	内 ヘラナデ→黒色処理 外 ヘラケズリ	底部1/4残存 内 10YR4/1(褐灰) 外 7.5YR6/3(にぶい褐)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
9	土師器壺	(16.0) (12.3)	内 口縁部横ナデ→ミガキ・胴部ヘラナデ 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 10YR7/3(にぶい黄褐) 外 10YR7/4(にぶい黄褐)	きめ細かい。 1mmの赤色粒子、石英・長石粒子を少含む。	
10	土師器壺	(20.8) — (12.6)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 脱部ヘラナデ→口縁部横ナデ	口縁部1/10残存 内 10YR8/3(浅黄褐) 5Y4/1(灰) 外 10YR8/3(浅黄褐)	4mm以下赤色粒子含む。	
11	土師器壺	(23.6) (10.4)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ→ミガキ	口縁部1/10残存 内 7.5YR7/4(にぶい橙) 外 5YR7/4(にぶい橙)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子少含む。小石含む。 内面、口縁部剥離。 外縁、磨耗著しい。	
12	土師器壺	— (8.7) (4.0)	内 ヘラナデ 外 刷・ヘラナデ・底部ヘラケズリ(磨耗してい、单位の判別できない)	底部1/2残存 内 7.5YR7/4(浅黄褐) 外 7.5YR7/4(にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子を少含む。	
13	土師器壺	19.1 — (19.6)	内 口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 7.5YR4/1(褐灰) 外 7.5YR7/3(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子を少含む。	
14	土師器壺	— 5.0 (5.7)	内 ヘラナデ 外 ヘラケズリ	底部1/2完形 内 5YR6/4(にぶい橙) 外 5YR5/1(褐灰)	5mm以下の赤色粒子含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少含む。	



第12図 H 4号住居址

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
15	動物石	14.6	6.5	3.6	745	安山岩。擦面あり。	
16	四石	8.4	6.3	3.8	85	鰐石。擦面あり。	

5) H 5号住居址 (第13図、第6表、図版2・36)

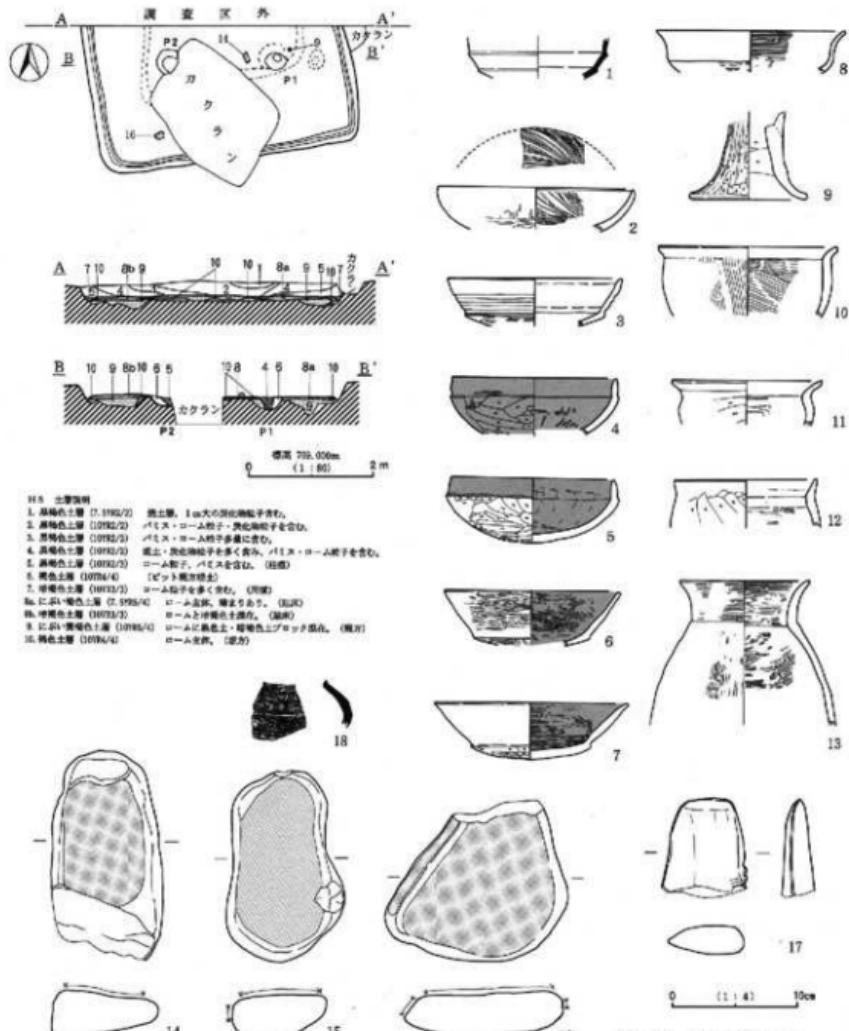
Aこそ6グリットにあり、北半域は調査区域外である。住居址の約南半分の調査を行った。検出面、構築土層はP1のローム中である。覆土は黒褐色を呈する。本住居址では擾乱により破壊を受けているが、住居址のズレは看取できなかった。しかし、柱穴のセクションをみると水平に切れているので、床下でズレがあったかもしれない。東西長386cmを測り、カマドは調査区域では検出されていない。主軸方位はN-14°-Wを指す。

出土遺物には須恵器と土師器・織物石・砥石がある。須恵器は高杯杯部(1)と拓本に示した壺の胴部片(18)がある。土師器は杯(2~7)、鉢(8~10~12)、高杯(9)、長胴のミガキ壺(13)である。須恵器高杯は破片であるが長脚の高杯の杯部であろうか。陶器山85(MT85)あたりと類似している。18は長頸壺か壺の胴部である。高藏23型式(TK23)の所産かと思われる。混入品であろう。土師器杯は1は口縁が全体に内湾する器形で内面には放射状の暗文が残る。3の杯は有段口縁の杯で丸底から外縁を持って屈し、口縁に沈線に近い2条の段を有す。黒色を帯びず橙色である。4・5は須恵器杯身模倣の杯で深い丸底から、口縁部は少し屈曲して、短く直立する。外底部はヘラケズリ、口縁部横ナデされ、内面はミガキ黒色処理される。6・7は浅い平底に近い底部から内外に外縁を持つ口縁部が直線的に外傾するものである。内面のミガキ黒色処理は同じであるが、6の外面は全面にミガキ、7は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ調整のままである。9の高杯脚部は柱状で、裾部は短い。外面はヘラケズリ後ミガキ調整される。13のミガキ壺は細く丁寧に内外にミガキ調整され、胎土は緻密で白っぽい。17は白色の凝灰岩製で砥石であろうか。

これらより、本址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第6表 H 5号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 高杯	— <3.4	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	破片 内 N8/0(灰白) 外 N8/0(灰白)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 自然輪着付。	
2	土師器 杯	(15.5) <3.3	内 横ナデ→放射状の暗文を施す 外 横ナデ→体部ミガキ	口縁部1/10残存 内 SYR7/4(にぶい橙) 外 SYR7/4(にぶい橙)	きめ細かい。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。 放射状暗文あり。	Ⅱ区
3	土師器 杯	(14.0) (11.2) <3.8	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→底部ミガキ 口縁部に2条の横筋を施す	口縁部1/8残存 内 7.5YR8/3(浅黄橙) 外 2.5YR6/3(にぶい橙)	きめ細かい。 1mmの赤色粒子少量含む。	
4	土師器 杯	(13.2) <4.5	内 口縁部横ナデ→みこみ部ミガキ→黒色 外 口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ→一部 ミガキ→黒色処理	口縁部1/2残存 内 7.5YR3/1(黒褐) 外 7.5YR3/1(黒褐) 断 10YR8/3(浅黄橙)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。きめ細かい。 外側、体部磨耗著しい。	
5	土師器 杯	13.1 5.1	内 口縁→体部横ナデ→みこみ部ミガキ→ 黑色処理 外 口縁部横ナデ→ミガキ→体部ヘラケズリ→ 一部ヘラケズリ→口縁部黒色処理	口縁部3/4残存 内 7.5YR1.7/1(黒) 外 5YR8/3(浅黄橙)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
6	土師器 杯	(14.0) (9.2) <4.3	内 ミガキ→黒色処理 外 ミガキ→底部ミガキ	口縁部1/4残存 内 10YR1.7/1(黒) 外 2.5YR6/6(橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
7	土師器 杯	(15.4) (9.5) 4.4	内 ミガキ→黒色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁→底部1/2残存 内 10YR1.7/1(黒) 外 5YR6/3(浅黄橙)	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
8	土師器 鉢	(15.2) <3.4	内 ミガキ 外 口縁部横ナデ→底部ミガキ	口縁部1/8残存 内 7.5YR5/3(にぶい橙) 外 7.5YR5/3(にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
9	土師器 高杯(脚部)	9.4 <7.0	内 脚部横ナデ→脚柱部ヘラケズリ 外 ケズリ→ミガキ	脚部完形 内 5YR7/4(にぶい橙) 外 NS/0(灰灰)	1mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。0.5mm以下の石英・長石粒子含む。	
10	土師器 鉢	(14.4) <5.6	内 脚部ハケメ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ・脚部ハケナデ	口縁部1/8残存 内 7.5YR7/4(にぶい橙) 外 5YR6/2(灰灰)	1mmの黒色粒子、石英・長石粒子多く含む。	Ⅱ区
11	土師器 鉢	(12.0) <3.5	内 口縁部横ナデ・脚部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・脚部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 10YR6/2(灰黄褐) 外 5YR7/4(にぶい橙)	2mm以下の赤色粒子、黒色粒子、石英・長石粒子多く含む。	
12	土師器 鉢	(11.4) <3.8	内 口縁部横ナデ・脚部ナデ→ミガキ 外 口縁部横ナデ・脚部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 2.5YR5/2(灰赤) 2.5YR3/1(暗赤) 外 2.5YR6/3(にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
13	土師器 壺	(10.4) <11.6	内 ミガキ(脚部ハケナデ→ミガキ) 外 ミガキ	口縁部1/2残存 内 5YR7/3(にぶい黄橙) 外 5YR7/3(にぶい黄橙)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。 崩壊している。	



第13図 H5号住居跡

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位置
14	漆石	16.5	8.9	3.8	825	安山岩。	
15	漆石・瑪瑙石	15.2	9.6	3.6	630	安山岩。	
16	漆石	12.9	14.5	3.6	945	安山岩。	
17	瑪瑙石	(3.9)	3.4	1.3	15.6	霞沢岩。	

### 6) H 6号住居址 (第14図、第7表、図版3・36)

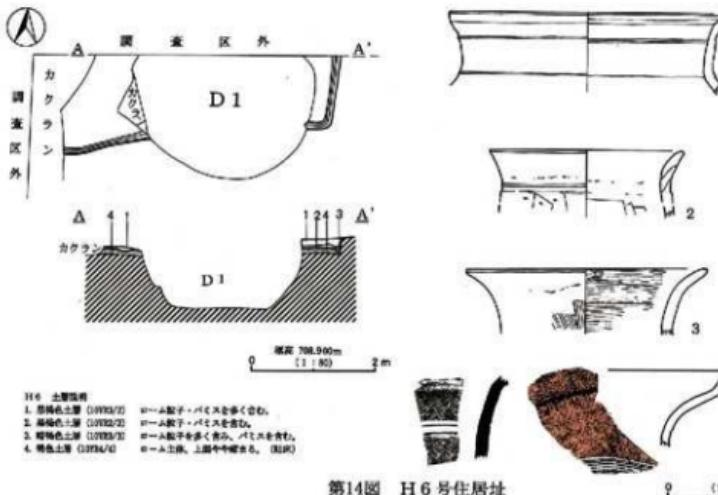
B1e 6グリットにあり、北側大半を調査区域外のため調査できず、東は擾乱され、D 1と重複し壊され、住居址は床面の一部のみ調査できた。本址は、部分的あるためか地盤のズレは確認できなかった。柱穴・カマドは調査区域内では検出されなかった。

出土遺物には土師器・須恵器・弥生式土器がある。弥生式土器は赤色塗彩の破片が多いが図示したものは口縁がL字状を呈す受け口の壺の口縁部片である。赤色塗彩され、頸部には模様文が施文される。

須恵器は壺の口縁部片で、外面に波状文が施文され、中位には2条の沈線の間に突起をつくり出している。高藏23型式あたりのものであろうか。断面の色調は陶器のものと同色を呈している。

土師器は破片はあるものの実測個体は少ない。丸胴壺(1)・小型壺(2)・長胴壺(3)がある。実測できなかつたが、口縁が内稜を持って外方に折れ、底部は深く、内外に暗文を施すもの。高杯は杯部・内外面と脚部に暗文を施すものがみられる。1は丸胴壺の口縁部で、口縁部は内外横ナデされ、端部は内湾直立している。H10.12の丸胴壺と接合し、同一固体。3は胴部外面にハケ目が残る。器形が全体でわからないが、まだ長胴化していない壺なのであろうか。破片には底部の底厚が3.5cm程のものもある。

破片資料で明確にはいえないが、古墳時代後期に位置づけられよう。



第14図 H 6号住居址

第7表 H 6号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	注量	成形・溝型	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師壺 壺	(22.5) — (6.3)	内 横ナデ 外 横ナデ	口縁部1/4残存 内 10YR7/3 (にぶい黄褐) 外 7.5YR8/3 (浅黄)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。	II区
2	土師壺 壺	(15.5) — (5.3)	内 口縫部横ナデ・脚部へハケナデ 外 口縫部横ナデ・脚部へハケナデ	口縫部1/4残存 内 5YR6/4 (にぶい橙) 5YR4/1 (褐灰) 外 5YR6/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、小石含む。	II区
3	土師壺 壺	(19.2) — (5.2)	内 ハケナデ 外 口縫部横ナデ・脚部へハケナデ	口縫部1/5残存 内 5YR2/4 (にぶい橙) 外 7.5YR7/4 (にぶい橙)	2mmの赤色粒子、黒色粒子含む。	II区

7) H 7号住居址 (第15図、第8表、図版3・36・37・57)

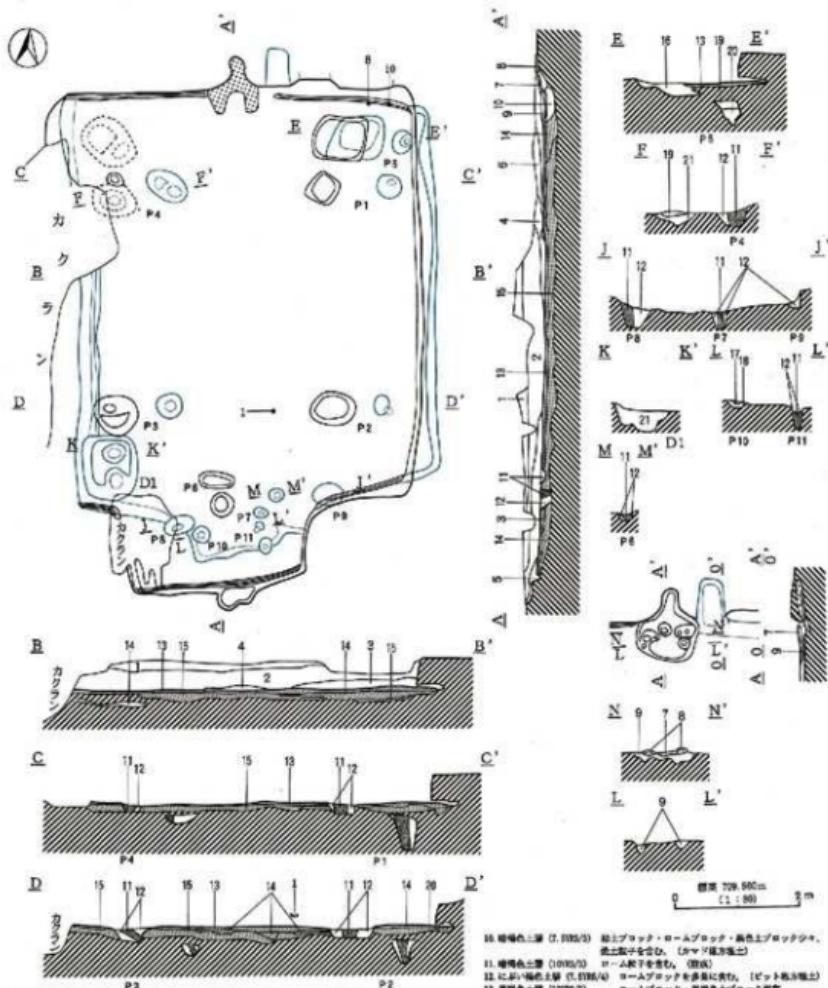
本住居址はC<1グリットにあり、西で擾乱される。ここでも地盤のズレが確認され、床面で20~30cm、床下のローム層中で100cm程西に動いている。住居址の規模は南北長576cm、東西長556cmで南側に150cmほどの張り出しが検出された。カマドは北壁にあり、暗褐色を呈す粘質土で構築されていた。灰・焼土が火床に残っていたが、移動したため、堀方は明瞭ではなく、東に、煙道の底面だけが残っていたりした。主柱穴は4本検出され、北東と南西にもビットがあった。南側中央にも出入り口に関連する柱穴が多くみられる。

出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、織物石(13)、石鐵(14)、褐灰色チャート製)がある。弥生式土器は口縁端部に飾り文、頂部に横縞状文の無彩の壺、波状文・斜条痕の壺片がある。赤色塗彩の杯・壺片もみられる。織物の土器片もみられた。

須恵器は拓本に示した壺の副部片である(16)。胎土分析では陶邑産とされた。土師器は杯(1~5)・鉢(6~8)・長脚壺(11・12)・盤(10)がある。1は須恵器蓋の模倣杯で、丸底から外縁を持ってやや屈曲し、口縁が直立する。内面は口縁部横ナデ、底部ナデ、外面は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリされ均一な仕上げである。2は小さな丸底から外縁を持ち、屈曲し口縁が直線的に外傾する。内外ミガキ調整され、内面は黒色処理される。3は1と同様の器面調整

第8表 H 7号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	13.5 12.8 4.8	内 横ナデ→みこみ部一部ナデ 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	ほぼ完形 内 SYR7/3 (にぶい橙) 外 SYR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。	II区 III区 2層
2	土師器 杯	— (8.2) (3.3)	内 ミガキ→黑色処理	底盤1/2残存 内 10YR4/2 (灰黄褐色) 外 2.5YR6/6 (橙)	きめ細かい。 1mm以下赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	IV区
3	土師器 杯	(13.4) (11.7) 4.6	内 みこみ部ヘラナデ→横ナデ 外 底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内 SYR7/4 (にぶい橙) 外 SYR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	P 5
4	土師器 杯	(13.1) — 4.5	内 口縁部横ナデ・みこみ部ナデ→暗文块ミ ガキ 外 口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 5YR8/4 (浅橙) 外 2.5YR7/6 (橙) 7.5YR7/2 (明褐灰)	2.5mm以下の赤色粒子多く含む。床 1mm以下の石英・長石粒子含む。 腐耗している。	床
5	土師器 杯	(13.6) 11.5 4.5	内 横ナデ暗文块ミガキ→黑色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 10YR4/1 (褐灰) 外 10YR8/3 (浅黄褐色) (外縁一部開閉)	1mmの赤色粒子含む。	P 4・隅方
6	土師器 鉢	13.4 7.9 9.5	内 口縁部横ナデ→肩→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・肩部ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部3/4残存、底部完形 内 7.5YR6/4 (浅黄褐色) 外 7.5YR6/3 (浅黄褐色) 7.5YR7/2 (明褐灰)	きめ細かい。 1mmの赤色粒子少量含む。	P 4
7	土師器 鉢	14.0 8.4 12.1	内 口縁部横ナデ→肩→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→肩、底部ヘラケズリ	口縁部1/2残存、底部完形 内 10YR7/3 (にぶい黄褐色) 外 7.5YR7/3 (にぶい橙) 7.5YR6/2 (灰褐色)	きめ細かい。 1mm前後の黒色粒子、赤色粒子含む。	P 5
8	土師器 鉢	15.2 8.0 14.7	内 肩部ヘカナデ→底部→肩下半部ナデ→ 口縁部横ナデ (→黒色処理?) 外 肩部ヘラケズリ→底部ヘラケズリ→口縁部ナデ	口縁部3/4残存、底部完形 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 7.5YR4/1 (褐灰) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	緻密。 1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。	I区 3層
9	土師器 壺	— (6.0) (2.7)	内 ハケナデ 外 肩部ナデ→ミガキ・底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内 10YR2/1 (黒) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mm以下の黒色粒子、赤色粒子少量含む。 1mm程度の石英・長石粒子含む。	I区 2層
10	土師器 瓶	16.7 6.2 13.7	内 肩→底部ハケナデ→口縁部横ナデ 外 肩・底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ →内外黒色処理	口縁部・底部完形 内 10YR3/1 (黒褐色) - 黒色処理 外 7.5YR6/1 (褐灰)	緻密。 1mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。 焼成後一孔穿孔。二次利用。	I区 2層
11	土師器 壺	(18.0) (7.6) —	内 肩上半ヘラナデ→口縁部横ナデ・肩下半 →底部ハケナデ 外 口縁部横ナデ→肩部ヘラケズリ・底部ヘ ラケズリ	口縁部1/4、底部1/2残存 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	緻密。 1mm以下の黒色粒子、3mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。	I区 2層 I区 2・3層
12	土師器 壺	(14.6) — (12.7)	内 口縁部横ナデ・肩部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→肩部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 2.5YR6/6 (橙)	粗い。 1mmの石英・長石粒子、赤色粒子多く含む。 小石含む。	IV区
13	土師器 高杯	(7.1)	内 肩部ミガキ (黒色処理?) 外 肩部横ナデ→肩部ヘラナデ 外 肩部ミガキ	肩部残存 内 7.5YR8/4 (浅黄褐色) 外 7.5YR7/2 (明褐灰)	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子、黒色粒子多く含む。小石含む。	II区
番号	種類	長さ	巾 厚さ	g	備考	出土位地
14	石鏡(完)	3.0	1.9	0.5	1.7	褐灰色チャート。
15	擦石	7.5	7.0	5.7	115	鈍石。



- |                         |  |
|-------------------------|--|
| 16. 墓場土色 (7, 070/5)     | 黒土色ブロッキ・ヨウモリヨウタ、青色土ブロッキテキ。<br>黒土色を含む。(ヨウモリヨウタ) |
| 17. 墓場土色 (070/2)        | 黒・朱色を含む。                                       |
| 18. にぼし・墓場土色 (1, 070/4) | ヨウモリヨウタを基調に朱色。(ゼット黒地墓場)                        |
| 19. 墓場土色 (070/2)        | ヨウモリヨウタ、朱色を含むヨウタ。                              |
| 20. 墓場土色 (070/2)        | 黒地アリ。(黒地)                                      |
| 21. 墓場土色 (070/2)        | 高麗色アリ。黒地アリ。ヨウモリヨウタを含む。                         |
| 22. にぼし・墓場土色 (1, 070/4) | ヨウモリヨウタを基調に朱色をアリ。                              |
| 23. 墓場土色 (070/2)        | 高麗色アリ。   |
| 24. 墓場土色 (070/2)        | (無)  |
| 25. 墓場土色 (070/2)        | ヨウモリヨウタを含む。                                    |
| 26. 墓場土色 (070/2)        | ヨウモリヨウタを含む。                                    |
| 27. 墓場土色 (7, 070/5)     | 黒土色を含む。  |
| 28. 墓場土色 (070/4)        | ヨウモリヨウタを含む。                                    |

第15図 H7号住居址(1)



第16図 H 7号住居址 (2)

であるが、1に比べると口縁と底部の稜が明確ではない。4は杯身の模倣なのであろうか、口縁端部が内傾する。内面には放射状の暗文がみられる。5は内面に暗文をもち、黒色処理され口縁は中位に沈線を持ち外反する。3~5は口縁と底部が明瞭な棱を作り出さず、曖昧である。また形もゆがみがある。6~7の鉢は口縁部が短く外反する同器形で大小、8は胴部と口縁部の間を屈曲させ直線的に口縁が外傾している。いずれも厚手である。10は底部に焼成後穿

孔した瓶である。小型壺の2次利用であろうか。口縁と胴部は後線を持っては屈曲し明瞭である。黒色処理されるが有段口縁杯の黒色処理同様に焼けた感触である。11の長腹壺は口縁が短く外反し、底径が大きい底部である。15は高杯の脚部であるが、円柱状を呈し、外面ミガキ調整される。裾部は一様に欠けているため2次利用の可能性もある。

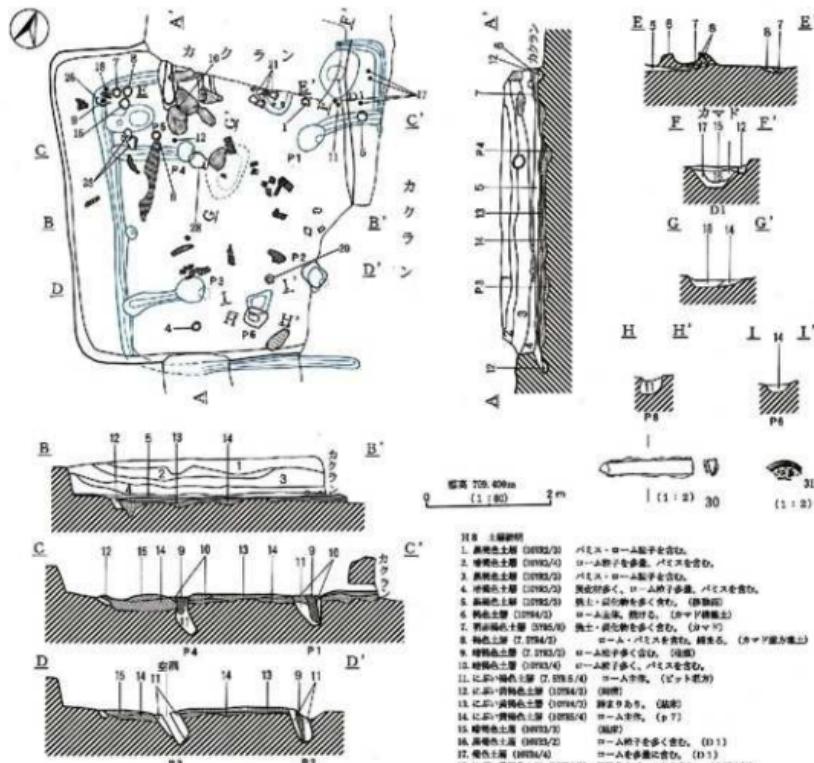
これらより、本址は古墳時代後期に位置づけられよう。

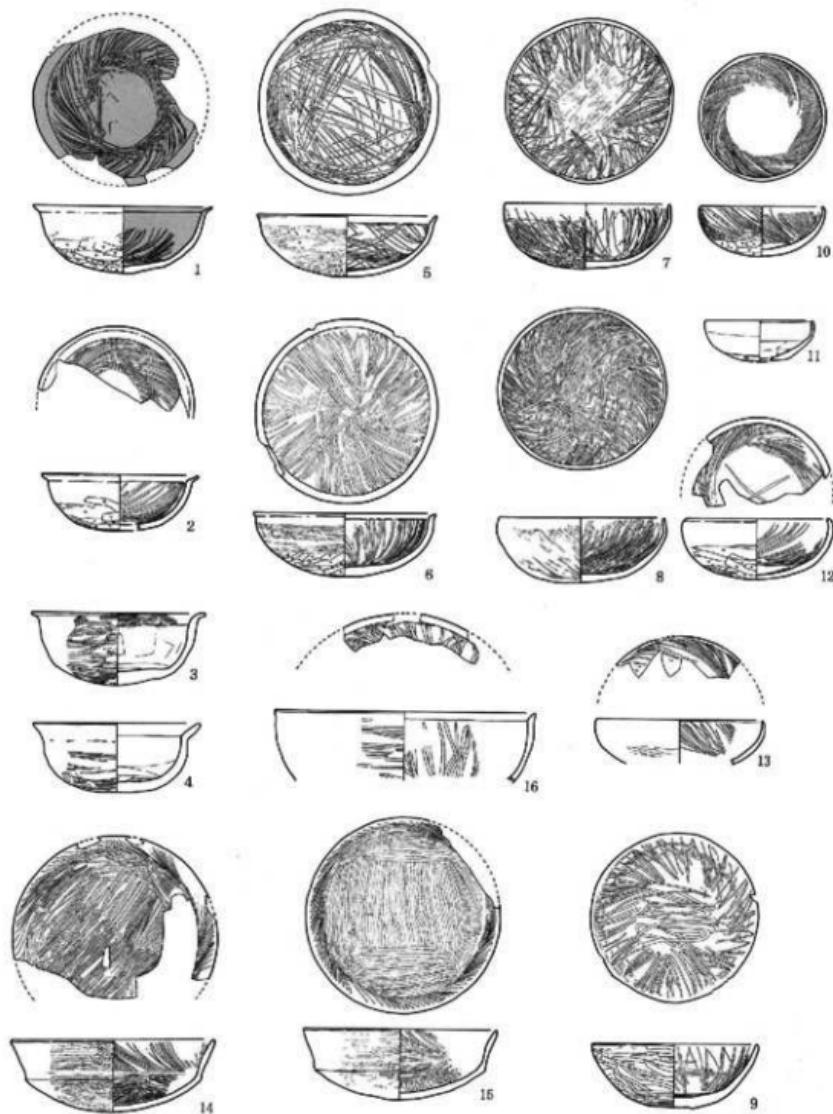
#### 8) H 8号住居址 (第17~19図、第9表、図版4・5・37~39・57)

C-C'グリットにあり、北と東に大きい擾乱がある。本住居址も床面近くで50cm西に移動し、柱穴も傾斜している。南北長452cm、東西長436cmの方形を呈す。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-28°-Wを指す。ローム層中に構築された住居址で覆土は黒褐色を呈す。焼失家屋で多量の炭化材、土器が検出された。

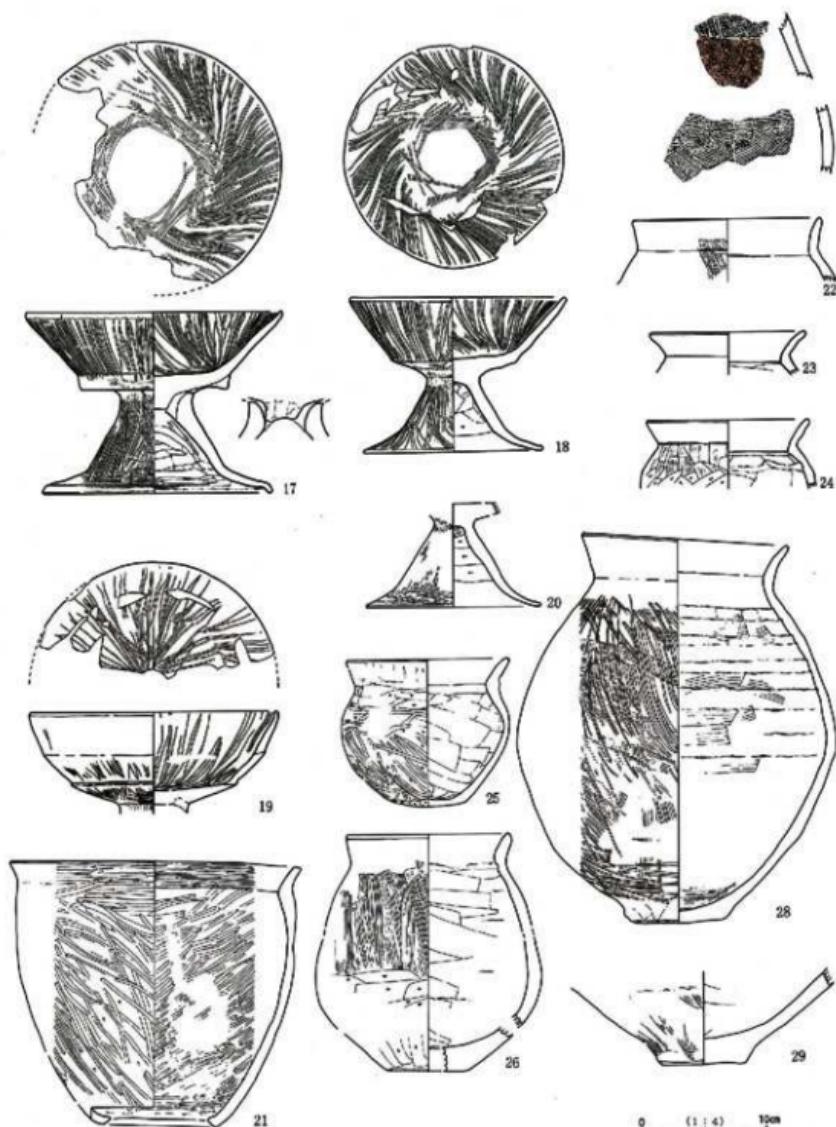
カマドは竈山のロームを掘り残して積み、その上に窯を組んで構築していた。周辺を壁下にもち、4本の主柱穴に壁から間仕切り溝が検出された。

本住居址からは弥生式土器、土師器、鉄製品、古鏡が出土している。弥生式土器は、赤色塗彩の壺で、頭部に矢羽根状の文様、壺は颈部に簾状文、胴上半に波状文・斜条痕文を施す壺である。これらはやい時代後期末頃の土器であろう。土師器は杯(1~15)・鉢(16)・高杯(17~20)・小型壺(22~24)・壺(27~29)・瓶(21)がある。





第18図 H 8 号住居址 (2)



第19図 H8号住居址 (3)

1・2の杯は丸底で器高が深く、口縁部が外方に折れるように短く外傾する器形である。2はさらに口縁端部が面と離れ、玉縁状になっている。内面は口縁上部が横ナデ、みこみ部はナデ後ミガキ調整され、文様状に暗文が施される。外面は底部2/3までが手持ちのヘラケズリ、上部と口縁部が横ナデ調整される。3は口縁部が短く外反している。外面はミガキ調整され、内面はナデ調整され外反する口縁部だけにミガキが施される。4は深い器形で口縁が腰を持って外方に折れているところは1・2の杯と似ているが、器肉は厚く、胎土は細かいが石英粒子などの混入物が多く残り、内面底部ナデ、上部横ナデされるだけである。3・4は鉢でもよいかしれない。5・6は口縁部の内稜を持って外傾する折れがいくらか緩やかで、短い。内面は全体にミガキ調整後、文様状に暗文を施している。外面も底部ヘラケズリ、上半と口縁部横ナデ後ミガキ調整される。7~13(9は除く)の杯は丸底の底部から口縁端部までそのまま内湾、口縁部はやや内傾気味になる器形である。作りは薄手で内面は底はミガキ上部横ナデ後、暗文を施す。外面は底部ヘラケズリ、口縁部横ナデ後、内面と同様な暗文を施している。11は暗文はない。大・小のセットがある。9は類似するがやや厚く、器身も一貫ではなく、内湾気味の口縁ではあるが直線的である。14~15は須恵器杯蓋の模倣杯で、丸底から中位よりやや下に外縁を持って屈曲し口縁は直線的に外傾する。口径が後のものと比較して大きい。内外ともミガキ調整をしている。杯は大別すると口縁部が外方に折れるタイプと、全体に内湾するタイプと、須恵器模倣杯の3種類がみられた。高杯は17~18が外面と杯内部に暗文を施すもので、17は杯脚下部端部をつまんで縁を作り出している。脚はラッパ状である。19は杯部中位に外縁を持ち2段階に外傾する。20はミガキ調整はするが暗文ではなく、色調にもぶい黄橙で白っぽい。26の小型甕は胴中位より下に最大径をもち、口縁部は「く」字形を呈する。胴部外面の上半はハケ目を残し、下半はヘラケズリされる。26の甕は土中位に最大径を持ち、口縁部は「く」字形を呈し、底部は台状である。胴部外面はミガキが疎らに施される。21の甕は1孔で内外面ミガキが調整される。

これらより古墳時代中期末から後期初頭に位置づけられよう。

第9表 H 8号住居址出土遺物一覧表

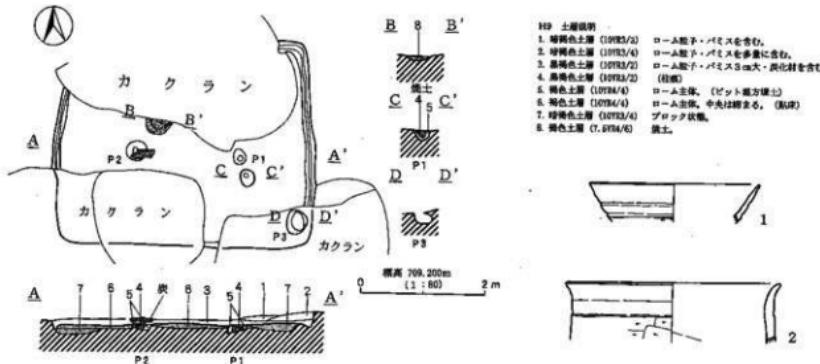
番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土縁器 杯	14.4 — 5.4	内 口縁部横ナデ・みこみ部ヘラナデ→暗文・黒色処理 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存、底部完形 内 N3/0(暗灰) 外 10R6/6(赤橙)	緻密。 1mmの石英・長石粒子含む。	I区
2	土縁器 杯	(12.6) — (4.5)	内 口縁部横ナデ・暗文 外 口縁部横ナデ・底部ケズリ	口縁部1/4残存 内 SYR6/4(にぶい緑) 外 SYR6/4(にぶい緑)	緻密。 1mm以下の赤色粒子含む。	カマド IV区東方
3	土縁器 杯	(13.9) — 5.8	内 底部ナデ→口縁部ミガキ 外 ミガキ	口縁部1/8残存 内 SYR5/3(にぶい赤褐) 外 2.5YR5/3(にぶい赤褐)	緻密。 1mm以下の赤色粒子少量含む。	II区3場 箱方
4	土縁器 杯	13.4 — 5.6	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ・底部ナデ(ササラサ工具使用)→底部ヘラナデ	完形 内 SYR6/6(橙) 7.5YR6/6(橙) 外 2.5YR6/6(橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子含む。	
5	土縁器 杯	17.0 — 4.9	内 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 外 口縁部横ナデ・体部ヘラケズリ→ミガキ	完形 内 7.5YR7/3(にぶい緑) 外 SYR6/4(淡橙) 2.5YR6/6(橙)	緻密。	
6	土縁器 杯	14.6 — 5.1	内 横ナデ→放射状暗文 外 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	完形 内 2.5YR5/4(にぶい赤褐) 外 2.5YR6/6(橙)	緻密。1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 内面みこみ部にヘラ記号あり。	
7	土縁器 杯	13.2 — 5.2	内 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 外 口縁部横ナデ・体部ヘラケズリ→暗文	完形 内 7.5YR6/4(にぶい緑) 外 2.5YR7/4(淡赤褐)	緻密。 1mmの赤色粒子、黒色粒子含む。	
8	土縁器 杯	13.2 — 5.3	内 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 外 横ナデ→ミガキ	完形 内 SYR5/4(にぶい赤褐) SYR6/4(にぶい緑) 外 2.5YR7/6(橙)	緻密。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。 外腹、磨耗。	
9	土縁器 杯	13.3 — 5.1	内 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 外 ミガキ	完形 内 10R6/6(赤橙) 10R6/6(赤橙)	緻密。 1mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。	
10	土縁器 杯	9.8 — 4.0	内 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→渦巻き状暗文→(黒色処理?) 外 口縁部横ナデ・体部ヘラケズリ→暗文	完形 内 7.5YR5/2(灰褐) 外 2.5YR6/6(橙)	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	

第9表 H8号住居址出土遺物一覽表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
11	土師器 杯	(8.9) - 3.2	内 みこみ部ハラナデ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ、底部ケズリ	口縁部1/3残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	截密。 1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子少含む。	I区
12	土師器 杯	(11.3) - 4.8	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ→渦巻き 状の暗文 外 口縁部横ナデ→底部ハラケズリ	口縁部1/3残存 内 2.5YR6/4 (にぼい橙) 外 2.5YR6/6 (にぼい橙)	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、石粒子、石英含む。内面みこみ部にヘラ記有り。(×)	II区3層
13	土師器 杯	(13.2) - (3.5)	内 横ナデ→暗文 外 口縁部横ナデ→ミガキ	口縁部1/4残存 内 2.5YR6/6 (橙) 外 2.5YR6/6 (橙)	截密。	I区
14	土師器 杯	16.3 14.0 5.8	内 暗文→(黒色処理?) 外 ミガキ	口縁1/3残存 内 SYR6/4 (にぼい橙) 外 5YR6/4 (にぼい黄)	1mmの石英・長石粒子、1mm以下の赤色粒子含む。	カマド附近
15	土師器 杯	15.6 5.7	内 暗文→(黒色処理?) 外 口縁部横ナデ、底部ハラケズリ→ミガキ	口縁部1/5残存、底部完形 内 7.5YR3/1 (黒褐) 外 2.5YR4/4 (にぼい赤褐)	1mm以下の石英・長石粒子、黑色粒子少含む。	
16	土師器 鉢	(21.0) - (5.6)	内 横ナデ→暗文→(黒色処理?) 外 横ナデ→ミガキ	口縁部1/6残存 内 10YR7/1 (褐褐) 外 10YR7/2 (にぼい黄骨)	1mm以下の石英・長石粒子多く含む。	I区
17	土師器 高杯	(20.4) (18.2) 14.5	内 底部 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ 暗文 部部 ハラナデ 外 杯部 口縁部横ナデ 脚部 暗文 脚柱部 暗文	口縁部 底部1/2残存 内 2.5YR7/6 (橙) 外 2.5YR7/6 (橙)	截密。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黑色粒子含む。	I区 I区附近 床下 床下D1
18	土師器 高杯	17.4 14.3 12.4	内 杯部 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 脚部 脚部横ナデ→脚柱部ハラケズリ 外 仔部 暗ナデ→暗文 脚部 脚柱部ナデ→脚部横横ナデ→(暗文) ミガキ	ほぼ完形 内 SYR6/4 (にぼい橙) 外 5YR7/4 (にぼい橙)	截密。 1mm以下の赤色粒子含む。	III区3・4層 IV区 IV区附近 カタラン
19	土師器 高杯	(20.0) - (8.1)	内 みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→放射状暗文 横ナデ→暗文状ミガキ	口縁部1/2残存 内 2.5YR5/4 (にぼい赤褐) 外 2.5YR7/6 (橙)	截密。 1mm以下の赤色粒子少含む。	I区
20	土師器 高杯	13.9 - (8.2)	内 杯部 ミガキ 脚部 横部横ナデ→脚柱部横位ハラケズリ 外 ミガキ	底部3/4残存 内 10YR7/3 (にぼい青骨) 外 10YR7/3 (にぼい青骨)	截密。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少含む。 外面部、脚柱部遺迹。	
21	土師器 板	23.2 9.7 21.1	内 ミガキ 外 口縁部横ナデ・胴部ハラケズリ→ミガキ 外 ミガキ	口縁部・底部完形 内 7.5YR6/2 (灰褐) 外 10YR8/3 (浅黃褐) 7.5YR6/4 (にぼい橙)	截密。 1mm以下の石英・長石粒子、黑色粒子少含む。	P5、P 6
22	土師器 小型壺	(15.2) - (5.1)	内 口縁部横ナデ→肩部ハラナデ 外 口縁部横ナデ→肩部ハラケテテ	口縁部1/8残存 内 5YR6/4 (にぼい橙) 外 10YR6/2 (灰褐) 5YR6/4 (にぼい橙)	1mmの石英・長石粒子多含む。 1mmの黑色粒子少含む。 砂質。	P区 床面
23	土師器 小型壺	(12.6) - (3.5)	内 口縁部横ナデ→胴部ハラナデ 外 横ナデ	口縁部1/4残存 内 5YR5/2 (灰褐) 外 5YR5/2 (灰褐)	砂質。 1~2mmの石英・長石粒子多含む。	カマド 瓶方
24	土師器 小型壺	(13.1) - (5.6)	内 胴部ハラナデ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ハケナダ→胴中央 ミガキ	口縁部1/4残存 内 5YR5/2 (灰褐) 外 10YR6/3 (にぼい黄骨)	1mmの石英・長石粒子多く含む。	II区3層
25	土師器 小型壺	(13.2) 6.4 11.7	内 口縁部横ナデ→胴部ハラナデ 外 口縁部横ナデ→胴部ハケナダ→胴・底部ハラケズリ→脚 ミガキ	口縁部1/2残存、底面部完形 内 10YR5/4 (赤褐) 外 10YR5/4 (赤褐)	1mmの石英・長石粒子多量、黑色粒子少含む。	
26	土師器 小型壺	(13.2) - -	内 口縁部横ナデ・脇部ハラナデ 外 口縁部横ナデ・脇部ハラケテテ	口縁部1/2残存 内 SYR4/1 (褐褐) 外 SYR7/4 (にぼい橙)	2mm以下の石英・長石粒子多く含む。 1mm以下の黒色粒子を含む。 砂質。	
28	土師器 壺	16.5 7.7 31.3	内 肩→底部ハケ状工具によるナデ→口縁 部横ナデ 外 口縁部横ナデ・胴部ハケ状工具によるナ デ→ミガキ・底部ハラケズリ	口縁部1/2残存、底部完形 内 SYR6/4 (にぼい橙) 外 SYR6/4 (にぼい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、2mm以下の黒色粒子含む。 5mmの小石含む。	
29	土師器 壺	- 7.0 (7.4)	内 ヘラナデ・底部ハラケズリ (?) 外 脚部ハラナデ 内面墨漬、釉離している。外面部黒化している。	底部完形 内 10YR7/3 (にぼい黄骨) 外 10YR7/3 (にぼい黄骨)	1mm以下の石英・長石粒子多く含む。 砂質。焼があまい。	
番号	種類	長さ	巾	厚さ	備考	出土位地
30	伝製品	<3.8>	0.6	0.4	4.4 刀子。	
31	古鏡	-	-	-	「錠○○○」銘入品。	

### 9) H 9号住居址 (第20図、第10表、図版5・39)

Dあたり4グリットにあり、H10号住居址を切る。北と南に擾乱があり、壁の残りも少なく浅いため明確な検出状況ではなかった。ローム層中に構築される。覆土は暗褐色を呈す。H10号住居址との重複した床面はわからなかった。南北長306cm、東西長396cmの長方形を呈す。カマドは擾乱で壊されたものと推定され、北にわずかな焼土範囲がみられた。主軸方位はN-5°-Wを割る。主柱穴は住居址中位に東西に2個検出された。壁下には周溝が巡っている。柱穴のセクションからみると、住居址は移動しているものと思われるが、明確な地盤のズレはつかみきれていない。

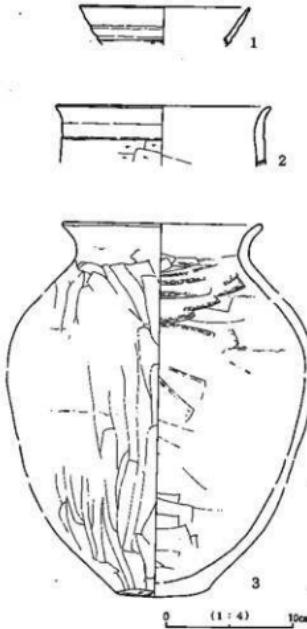


第20図 H 9号住居址

出土遺物には弥生式土器、土師器が少量ある。弥生は赤色塗彩の壺片、撫拂波状文の壺片がある。土師器は土師器杯(1)、鉢(2)、壺(3)がある。

1は有段口縁杯の小片でH10号住居址に帰属し、底部から外縁を持って屈曲し口縁部は外傾、口縁部に沈線に近い段がある、有段口縁杯である。3の壺は口縁部横ナデされ胴部外面がヘラナデ調整されるもので、最大径を肩部に持ち、頸部はすぼまり、口縁は短く外反している。胎土は緻密である。

これらから古墳時代後期に位置づけられよう。



第10表 H 9号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	(13.6) — <3.1>	内 横ナデ 外 口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ 口縁部中央に一条の沈線を施す	口縁部1/8残存 内 7.5YR8/4 (浅黄橙) 外 7.5YR8/4 (浅黄橙)	きめ細かい。 1mmの赤色粒子含む。	場所
2	土師器 鉢	(17.2) — <4.8>	内 口縁部横ナデ→肩部ヘラナデ 口縁部横ナデ→肩部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内 5YR5/2 (灰褐) 5YR1.7/1 (黒) 外 5YR5/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 小石含む。	カクラン
3	土師器 壺	(15.9) 7.4 30.0	内 口縁部横ナデ→肩→底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→肩部ナデ→底部ヘラナデ	口縁部1/4、底部2/3残存 内 7.5YR4/1 (褐紅) 5YR5/4 (にぶい橙) 外 5YR5/2 (灰褐)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	検出

10) H10号住居址 (第21・22・23図、第11表、図版6・7・39・40)

D15グリットで検出された。西は調査区域外のため調査できなかった。壇乱に東壁を3カ所壊され、カマドの西側も壊乱される。H9号住居址に切られ、SM3号周溝・H11・H30号住居址を切る。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。本住居址も床面付近で、50cm程度が北西に移動しており、床下のローム層中でも柱穴が傾斜し、地盤のズレの状況が顕著である。南北長798cm、東西は残長で800cmを測り、ほぼ方形を呈す。カマドは北壁に残り、やはり西北に移動し、焼土などから見ると2段階の移動の痕跡を残す。主軸方位はN-13°-Wを測る。カマドは煙道が残り、窓が2個同時に使用された様子が窺えた。

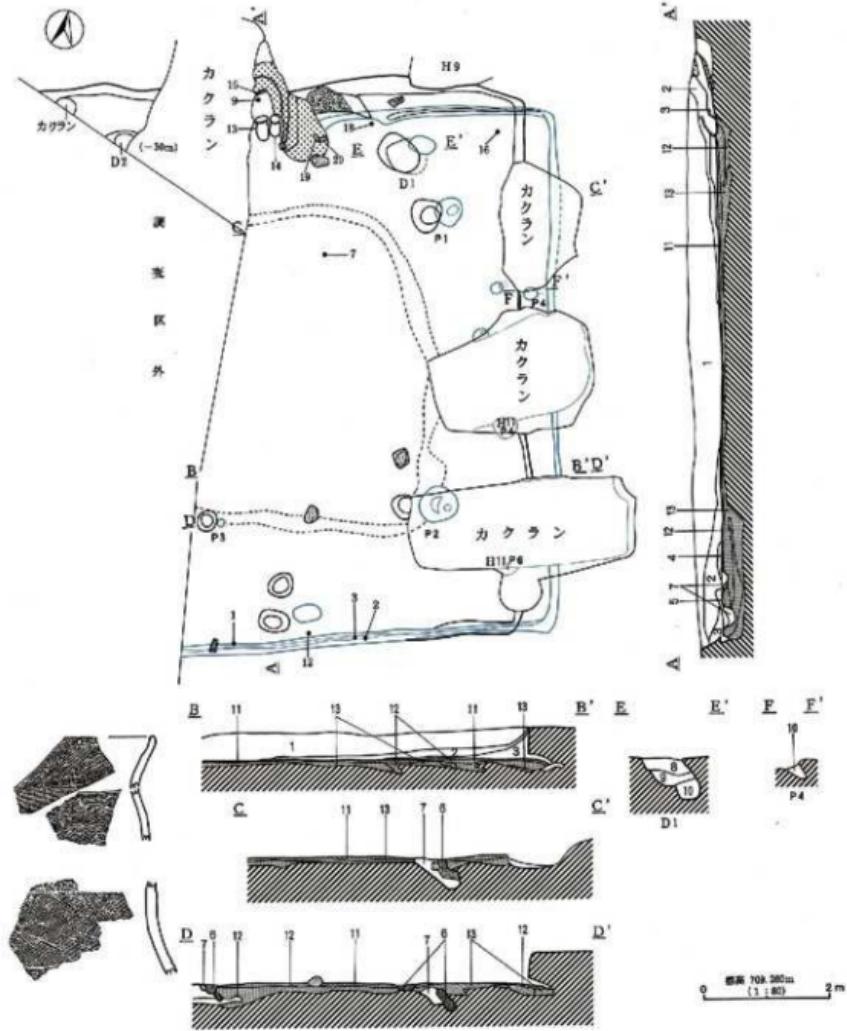
出土遺物には弥生式土器・須恵器・土師器・縞物石が出土している。弥生式土器は拓本に示した壺・壺の他に赤色塗彩された杯・壺がある。SM3号周溝と関連する資料であろうか。

須恵器高杯(1)は杯身部が残り、受け部は細く4mmほど外方に伸び、立ち上がりは内傾し、端部は丸い。内面は横ナデ、外面の底部は2/3程回転ヘラケズリされる。高33.5mm型(TK43)あたりに同様のものがみられる。土師器には杯(2・3)・高杯(4)・鉢(5~8)・小型壺(9)・丸胴壺(10~12)・長胴壺は(13~16)がある。2は有段口縁の杯で、薄手の作りで、平底に近い底部から外縁をもち、口縁部は屈曲して中位にわずかな稜を持って外側する。3は丸底の底部が山成に突出し、口縁部は外縁を持ち屈曲し、口縁部は直立している。杯身模倣の杯であろうか。2は内外面、3は内面のみミガキ調整をしないで黒色処理される。4は高杯脚部で、裾は外方に開き、ラバ状を呈す。外面に暗文が施される。12の丸胴壺はH6号住居址の3と接合する。淡黄を呈し、胎土は緻密である。13・14の長胴壺はカマドに並んでいたものであるが器形が異なる。13は口縁に最大径を持ち、胴部最大径は胴中位下にもつ。口縁部は直線的に外傾する。14は、口縁部が外半して最大径をもち、そのまま緩やかに径をすぼめて底部に至る。

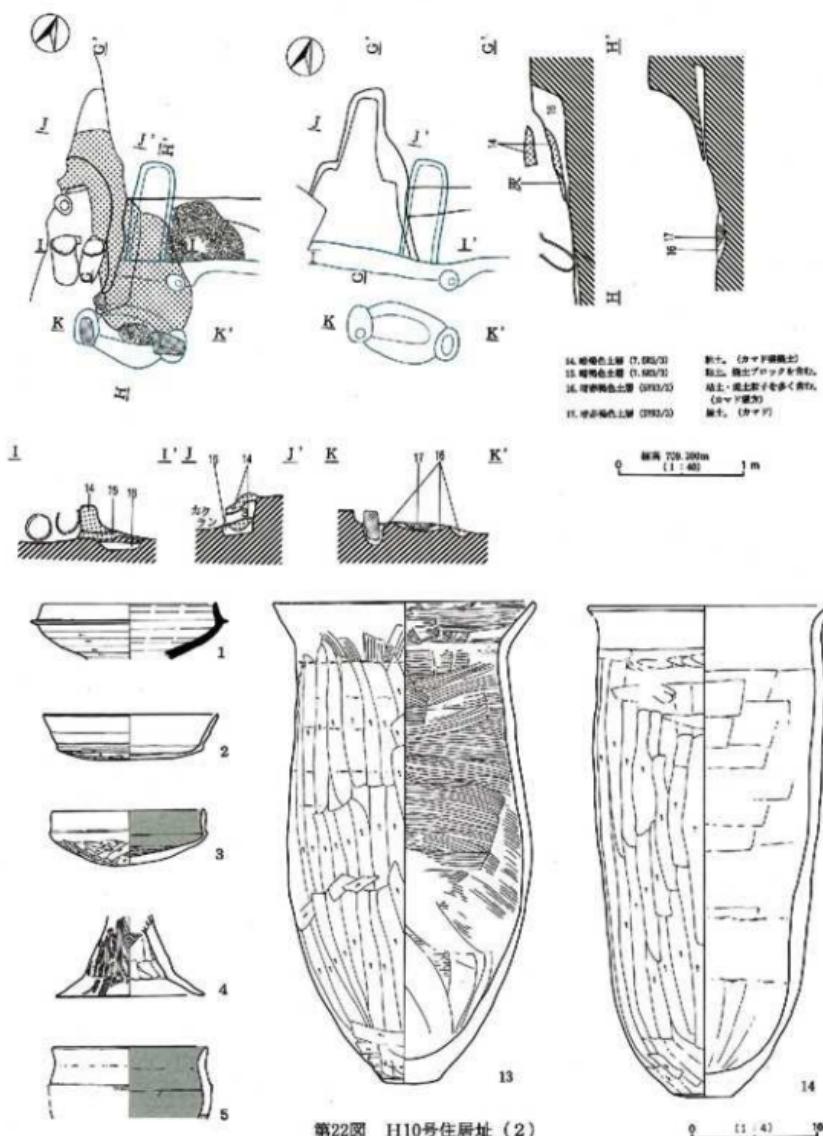
これらより、本址は古墳時代後期に位置づけられよう。

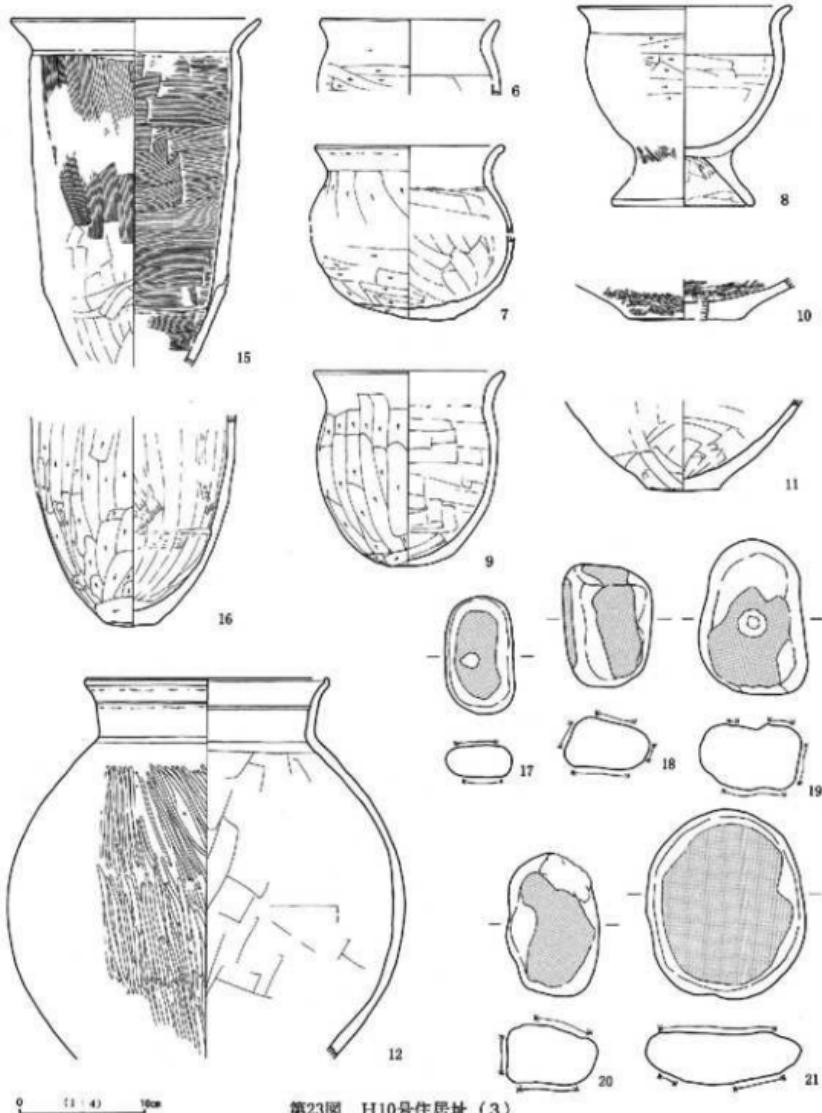
第11表 H10号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 高杯	(13.8) — (4.4)	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ+杯下部回転ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 N7/0 (灰白) 外 N7/0 (灰白)	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	
2	土師器 杯	(14.0) 11.7 3.6	内 みこみ部ナデ→口縁部横ナデ 外 口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ (内外無色差?)	口縁部・底盤1/2残存 内 SYL7/1 (黒) 外 SYR7/3 (にじいろ)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	
3	土師器 杯	12.2 12.5 4.4	内 みこみ部ヘナナデ→口縁部横ナデ 外 黑色処理 口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁・底盤3/4残存 内 7SYR2/1 (黒) 外 7SYR7/4 (にじいろ)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
4	土師器 高杯	— (11.8) (6.4)	内 ミガキ 外 ミガキ	底盤1/12残存 内 SYR8/3 (淡緑) 外 SYR7/4 (淡赤緑)	緻密。 1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
5	土師器 鉢	(12.4) — (5.7)	内 崩部ヘナナデ→口縁部横ナデ→黒色処理 外 崩部ヘナナデ→口縁部横ナデ	口縁部1/8残存 内 N4/2 (灰) 外 SYR6/3 (にじいろ)	緻密。	I区1層
6	土師器 鉢	(14.4) — (6.0)	内 口縁部横ナデ・崩部ヘナナデ 外 口縁部横ナデ・崩部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内 2.5YR3/1 (暗赤) 外 2.5YR6/4 (にじいろ)	1mm以下の石英・長石粒子含む。 床下 内面、剥離あり。	
7	土師器 小型壺	15.1 8.2 —	内 口縁部横ナデ→崩・底部ヘナナデ 外 口縁部横ナデ→崩・底部ヘラケズリ	口縁部・底盤完形 内 7SYR7/4 (にじいろ) 5YR5/2 (灰褐) 外 2.5YR6/6 (淡) 5YR6/3 (にじいろ)	6mmのチャート他、粗い結物多く含む。 外面、磨滅著しい。	III区3層
8	土師器 台付鉢	(17.0) (11.0) 15.9	内 鉢部 崩部ヘナナデ→口縁部横ナデ 鉢部 ヘナナデ 外 鉢部 崩部ヘラケズリ→口縁部横ナデ 崩部 横ナデ→接合部分にハケナナデ	口縁部・底盤1/2残存 内 SYR7/4 (にじいろ) 2.5YR7/4 (淡赤) 外 SYR7/4 (にじいろ) 5YR8/4 (淡)	5mm以下の赤色粒子を多量含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。 内外剥離、磨滅著しい。	I区1層 III区3層
9	土師器 小型壺	15.2 7.7 15.5	内 口縁部横ナデ→崩・底部ヘナナデ 外 口縁部横ナデ→崩・底部ヘラケズリ	ほぼ完形 内 2.5YR6/4 (にじいろ) 2.5YR6/4 (にじいろ)	7mm以下のチャートを多く含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	カマド I区瓶方
10	土師器 壺	— (8.9) (3.2)	内 ヘナナデ→部分的にミガキ 外 底盤ミガキ	底盤1/4残存 内 10YR5/1 (褐灰) 外 2.5YR6/4 (にじいろ)	0.5mm以下の石英・長石粒子含む。	P4
11	土師器 壺	— (6.0) (7.3)	内 ヘナナデ 外 崩部ヘナナデ・底部ヘラケズリ	底盤1/2残存 内 7YR5/1 (褐灰) 外 5YR7/3 (にじいろ)	8mm以下の小石多く含む。	



第21図 H10号住居址 (1)





第23圖 H10号住居址 (3)

第11表 H10号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
12	土師器 甕	(19.5) — (30.5)	内 口縁部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外 脚部ヘラケズリミガキ→口縁部横ナ デ 口縁部に沈線一条を施す。	口縁部3/4残存 内 2.5Y8/3 (淡黄) 外 2.5Y8/3 (淡黄)	緻密。 1mmの赤色粒子、黒色粒子含む。	P 4、棟出
13	土師器 甕	21.0 5.0 38.4	内 ハケナデ 外 口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズリ	ほぼ完形 内 7.5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR7/3 (にぶい橙)	緻密。 2mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。	カマド カマド周辺
14	土師器 甕	(19.6) 5.0 39.2	内 口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→脚部ヘラケズリ→一部 ナデ、底部ヘラケズリ	口縁部1/3残存、底部完形 内 7.5YR7/3 (にぶい橙) 外 10YR7/3 (にぶい黄橙)	2mm以下の石英・長石粒子含む。 3mm以下の赤色粒子多く含む。	カマド
15	土師器 甕	(20.0) — (27.7)	内 口縁部横ナデ・脚部ハケメス 外 脚部上半ハケメス・脚下半ヘラナデ→口縁 部横ナデ	口縁部1/1残存 内 5YR7/4 (にぶい橙) 外 5YR8/4 (淡橙)	2mm以下の赤色粒子含む。	カマド Ⅲ区2層
16	土師器 甕	— 4.0 (16.8)	内 ハケナデ→ヘラナデ 外 脇・底部ヘラケズリ	底部完形 内 5YR6/4 (にぶい橙) 外 5YR7/4 (にぶい橙)	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。	出土位地
番号	種類	長さ	巾 厚さ	g	備考	出土位地
17	織物石	9.5	5.6	2.7	225	安山岩。擦面あり。
18	織物石	9.8	7.7	4.2	380	安山岩。擦面あり。
19	織物石	12.4	8.6	5.4	730	多孔質安山岩。凹あり。擦面あり。
20	織物石	11.3	7.4	4.8	525	安山岩。擦面あり。
21	石皿	15.2	12.7	4.3	1,190	安山岩。擦面あり。

11) H11号住居址 (第24図・第12表、図版7・40・57)

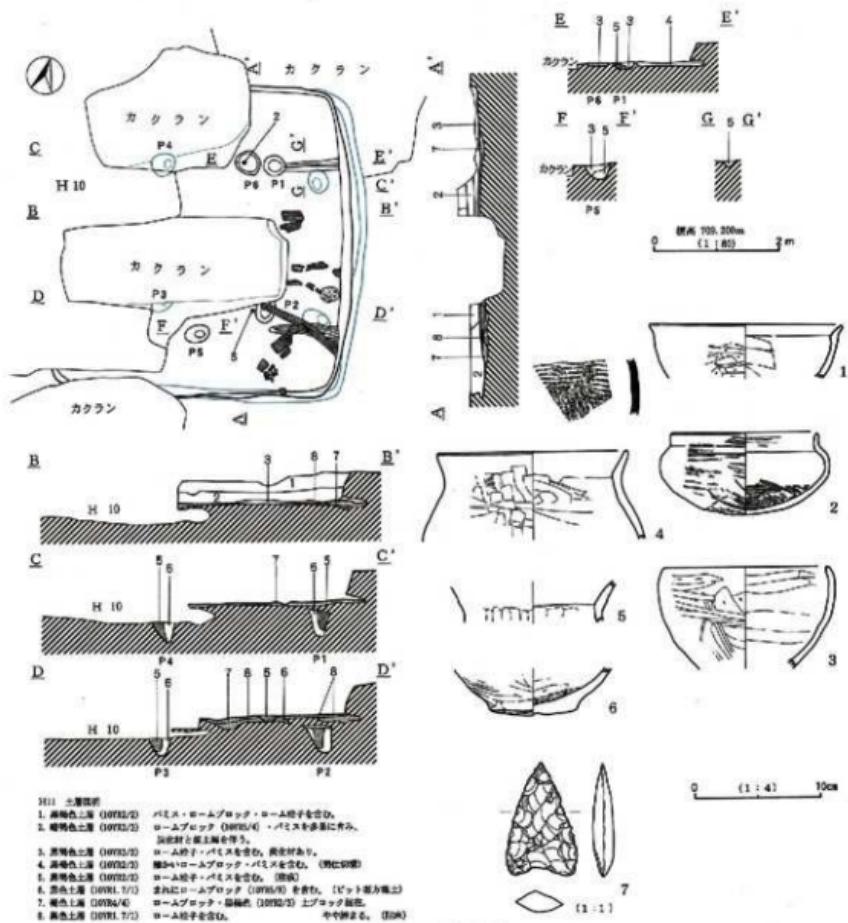
Dあ5グリットにあり、西を搅乱と、H10号住居址に切られる。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。焼失家屋で、炭化材が多く検出された。カマドは北壁にあったと推測されるが搅乱により壊されたようである。南北478cm、東西452cmと南北にやや長いが方形を呈す。主軸方位はN-16°-Wを測る。本住居址も地盤のズレのため、床面近くで30cmほど西にズレていた。また床下で60cmのズレがみられた。主柱穴は4本で、南に出入り口のピットが検出された。

出土遺物には須恵器、土師器、石鏡(7、黒曜石製)がある。須恵器甕(拓本)は陶邑産と胎土分析される。土師器は杯(1・2)・鉢(3)・小型甕(4~5)がある。1は口縁部が内稜を持って短く外方に折れるものである。2は鉢としてもよいが扁平で丸い体部から口縁が短く直立するものである。内外ミガキ調整される。4の甕は口縁部が「く」字状に外傾する。

これらより、古墳時代中期～後期初頭に位置づけられよう。

第12表 H11号住居址出土遺物一覧表

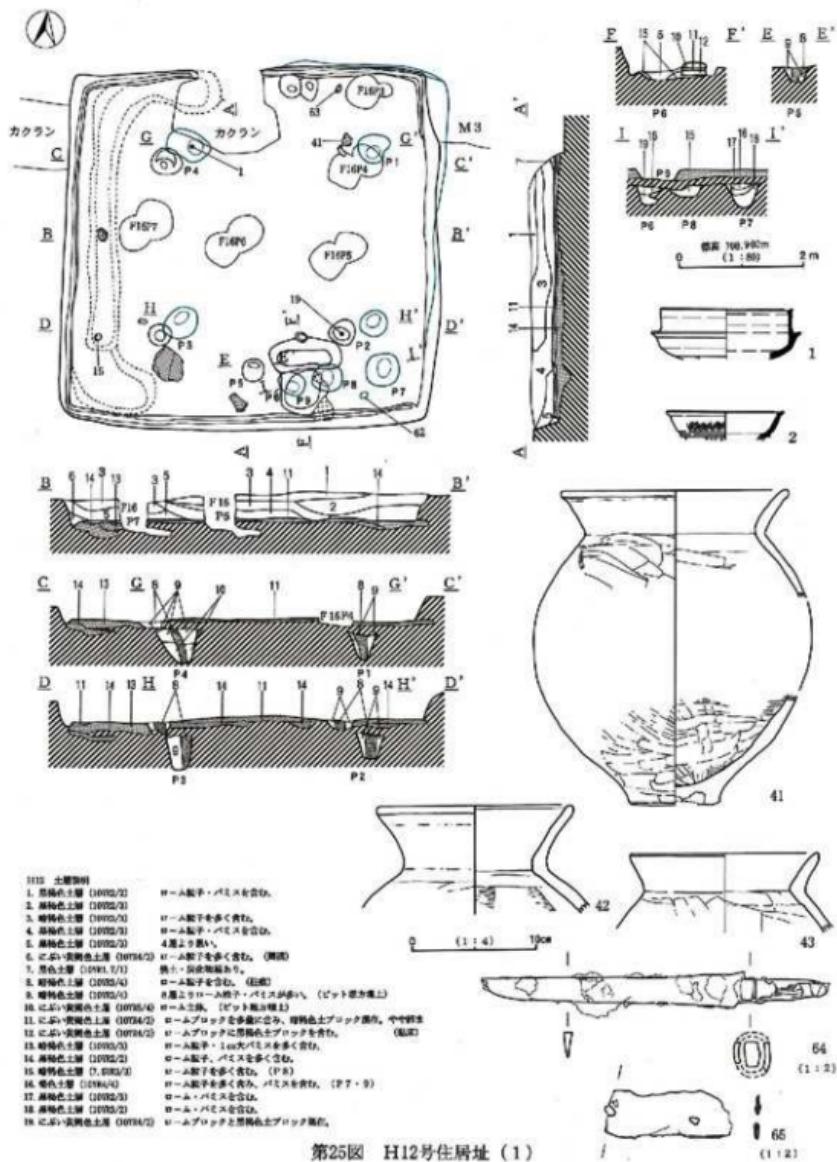
番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	15.4 — (4.3)	内 口縁部横ナデ→体部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内 10YR7/3 (にぶい橙) 外 7.5YR5/2 (灰褐)	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	Ⅱ区
2	土師器 杯	0.18.0 — 6.5	内 ミガキ 外 ミガキ	口縁～底盤1/2残存 内 10YR8/4 (にぶい橙) 外 2.5YR5/6 (橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 内面、磨滅している。	p 6
3	土師器 鉢	(13.0) — (8.1)	内 口縁部横ナデ→体部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ→部分 的にミガキ(?)	口縁部1/4残存 内 7.5YR6/6 (橙) 外 7.5YR6/6 (橙)	きめが粗い。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	I 区2層
4	土師器 甕	(15.4) — (7.0)	内 口縁部横ナデ→脚部ヘラナデ 外 口縁部横ナデ→脚部ヘラナデ	口縁部1/8残存 内 7.5YR5/2 (灰褐) 外 7.5YR7/2 (明褐)	きめが粗い。 2mm以下の石英・長石粒子多く含む。	
5	土師器 小甕	— — (3.3)	内 口縁部横ナデ→脚部ナデ 外 口縁部横ナデ→脚部ナデ	口縁部1/4残存 内 2.5YR5/6 (明赤褐) 5YR2/1 (黒褐) 外 2.5YR5/2 (灰赤) 2.5YR2/1 (赤黒)	1mm以下の石英・長石粒子含む。	
6	土師器 甕	(7.0) — (3.7)	内 ヘラケズリ・ヘラナデ 外 脚下半部ヘラナデ・底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内 5YR2/1 (黒褐) 外 5YR6/2 (灰褐) 5YR7/3 (にぶい橙)	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 小石含む。	IV区2層
番号	種類	長さ	巾 厚さ	g	備考	出土位地
7	石鏡	2.3	1.4	0.4	1.0	黒曜石。



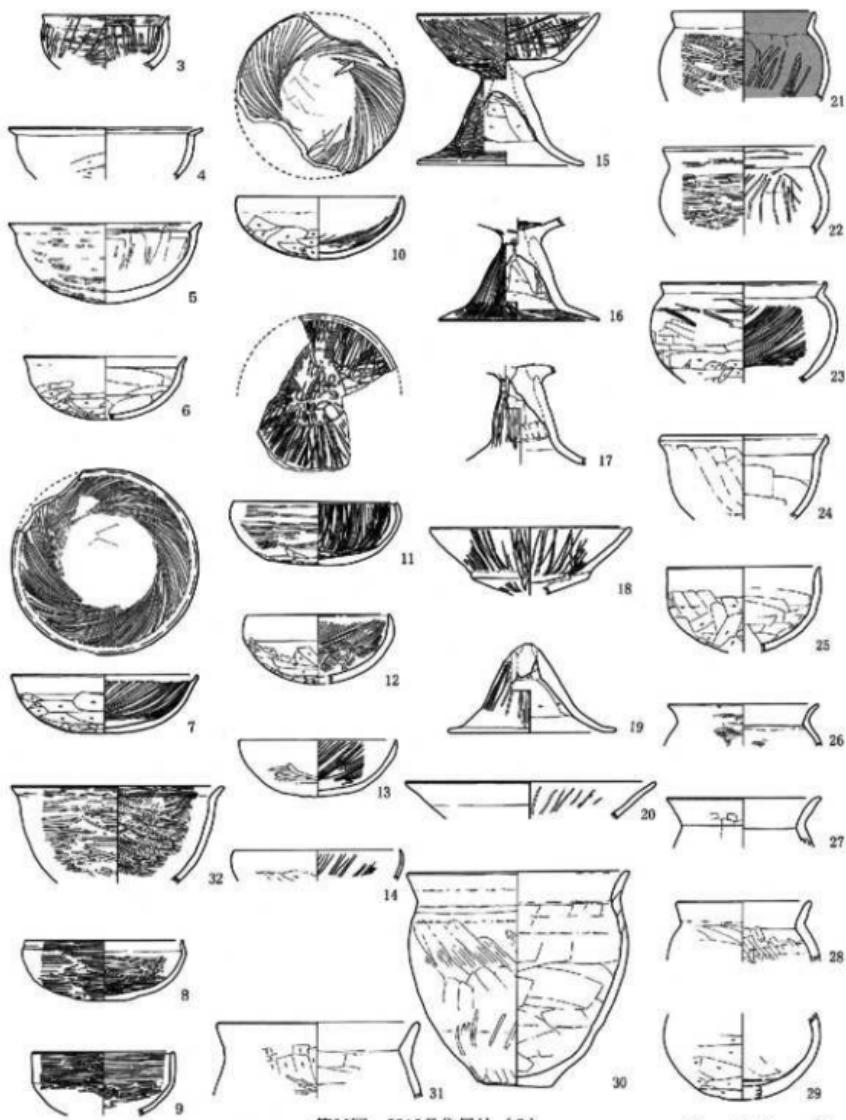
第24図 H11号住居址

## 12) H12号住居址 (第25~27、第13表、図版7・41~43)

C <10グリットにあり、F16号掘立柱建物址、M3号溝址に切られる。北にある搅乱によりカマド付近は破壊される。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。本住居址も地盤のズレが看取られ、床面付近で最大30cmまた床下では40cm程のズレがあった。主柱穴はP1～P4の4本である。南壁下中央よりやや東寄りにP6があり、ピットに接して北側に小窓を持っている。そのピットの南には粘土が置かれていた。この粘土の成分に近い粘土を持つ土器類が粘土分析の結果、土器器皿類とされこの期の杯類で占められる。工作用のピットであろうか。



第25図 H12号住居址 (1)



第26図 H12号住居址 (2)

0 (1/4) 10cm